

北谷町文化財調査報告書 第39集

クランモー

蔵 森

— 沖縄西海岸道路北谷拡幅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2016(平成28)年3月  
沖縄県 北谷町教育委員会

クランモー  
蔵 森

— 沖縄西海岸道路北谷拡幅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2016(平成28)年3月  
沖縄県 北谷町教育委員会

## はじめに

北谷村史には「(伊礼) 村の西南部に小高い岡があって其の麓は広場となり、岡の麓に獅子像を蔵めた瓦葺の小屋がある。」と記されています。人々はその場所を「クランモー (蔵毛、蔵森)」と呼んでいました。

戦前、伊礼集落の人々は、旅に出る村人の安全を祈願してこの岡からフナウクイ (船を見送ること) をし、岡の麓にある樹齢 400 年余のウスクガジュマルや拝所を大切に祀っていました。

戦後、集落は米軍に接收されましたが、郷友会の方々による返還要請の結果、1982 年 5 月 14 日にクランモーは返還されました。拝所や広場で年中行事を執り行うことができるようになり、旧暦の 8 月 15 日には月夜の下獅子舞が行われるなど、国道に面した立地ながらも古き良き集落の面影が残っていました。

しかし現在、一帯は道路工事により削平され、周辺は建物が建ち並び、岡に登ることも海を見渡すことも叶いません。

本報告書は道路建設に先立って町教育委員会が実施した発掘調査成果をまとめたもので、調査の結果、伊礼集落の祖霊を祀った拝所からは成人、幼児、乳児の骨片が発掘されました。骨片の年代を測定したところ、古いものでは今から 1300 年以上前の可能性もあり、200～300 年前と考えられていたこれまでの年代観よりも遙かに古くなることが明らかになりました。

拝所は伊礼の人々にとって心のよりどころであり、あるべき場所が失われてしまうのは心苦しいことではありますが、クランモーの拝所はウスクガジュマルと共に移転され新境地のもと信仰が引き継がれ、保護・保全されていることは大変喜ばしい事であります。

末尾になりましたが、本書が文化財保護の一助となることを願うと共に、本報告書を刊行するにあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位並びに、今回この様な機会に調査することを快諾頂きました伊礼郷友会の方々のご理解とご協力に深く感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

北谷町教育委員会  
教育長 川上 啓一

## 例 言

1. 本報告書は、平成 25 年度に実施した「蔵森」の調査結果をまとめたものである。
2. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/2, 500 地形図(昭和 54 年測量)を元に北谷町役場都市計画課が作成したものに、加筆し使用した。
3. 本書に掲載した、緯度、経度、平面直角座標は、世界測地系にもとづくものである。
4. 遺物の同定、助言等を下記の方にご協力いただいた(敬称略)。記して感謝申し上げます。

民 俗	八田 夕香 (沖縄市教育委員会 沖縄市郷土博物館)
人 骨	藤田 祐樹 (沖縄県立博物館・美術館)
5. 第Ⅲ章4節の自然科学分析を、株式会社パレオ・ラボに業務委託した。

放射性炭素年代測定	伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・ 山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadize・ 小林克也(パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ)
人骨の炭素・窒素安定同位体比分析	山形 秀樹・小林 克也(パレオ・ラボ)
6. 本報告書は、各執筆者の協力を得て、木村謙介(株式会社パスコ)が編集を行った。執筆分担は下記のとおりである。(所属名が無い場合は、株式会社パスコ所属)

第Ⅰ章 第1～3節	松原哲志(北谷町教育委員会)
第Ⅱ章 第1・2節	縄田 愛・島田 由利佳
第Ⅱ章 第2節(4)、第Ⅲ章 第1・2節、第Ⅳ章	木村 謙介
第Ⅲ章 第3節(1)・(2)	仲宗根 文子・富名腰 いづみ
第Ⅲ章 第3節(3)	城間 千栄子・宮良 知子
第Ⅲ章 第4節	山形 秀樹・小林 克也(パレオ・ラボ)
7. 遺物の注記・接合・実測・分類・集計・写真撮影・図面整理・トレース・図版作成などの資料整理は下記のとおりである。

木村 謙介・縄田 愛・島田 由利佳・蔵本 奈々絵・石川 千恵・宮良 知子・ 城間 春代・仲宗根 文子・城間 千栄子
--
8. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物は、全て北谷町教育委員会にて保管している。

## 本文目次

はじめに	
例言	
第I章 調査の経緯・経過	1
第1節 調査の経緯・体制	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査体制	2
第2節 発掘調査の経過	3
第3節 整理作業の経過	4
第II章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
(1) 位置と概要	5
(2) 自然的環境	5
第2節 歴史的環境	7
(1) 先史時代	7
(2) グスク時代	7
(3) 近世～近現代	7
(4) 蔵森（クランモー）の概要	10
第III章 調査の方法と成果	15
第1節 調査の方法	15
(1) 調査の方法	15
(2) 拝所移転記録	18
第2節 遺構	22
(1) 墓	22
(2) 井戸	25
第3節 遺物	27
(1) 墓	27
(2) 井戸	32
(3) 自然遺物	33
A 貝類遺体	33
B 動物遺体	35
C 人骨	35
第4節 自然科学分析「放射性炭素年代測定」	37
「人骨の炭素・窒素安定同位体比分析」	40
第IV章 総括	43
報告書抄録	

## 図版目次

図版 1	戦前の航空写真	11	図版 11	遺構（井戸）	51
図版 2	謝苺仮墓銘「字伊禮開祖之墓」	14	図版 12	遺構（井戸）	52
図版 3	蔵骨器	14	図版 13	現況	53
図版 4	蔵森（クランモー）周辺航空写真	16	図版 14	墓（1層）出土遺物	54
図版 5	墓移転記録	19	図版 15	墓（3～4層）出土遺物	55
図版 6	井戸移転記録	21	図版 16	墓（5層）出土遺物	56
図版 7	遺跡全景	47	図版 17	井戸・その他 出土遺物	57
図版 8	遺構（墓）	48	図版 18	貝類遺体	58
図版 9	遺構（墓）	49	図版 19	動物遺体	59
図版 10	遺構（墓）	50	図版 20	人骨	60
			図版 21	人骨	61

## 挿図目次

第 1 図	北谷町周辺地形・地層地質分類	6	第 7 図	墓（1層）出土遺物	29
第 2 図	北谷町の遺跡	8	第 8 図	墓（3～4層）出土遺物	30
第 3 図	石碑・香炉の拓本	13	第 9 図	墓（5層）出土遺物	31
第 4 図	調査区設定位置図	17	第 10 図	井戸・その他 出土遺物	32
第 5 図	遺構（墓）実測図	24	第 11 図	墓室出土・貝類遺体の生息場所別出土状況	34
第 6 図	遺構（井戸）実測図	26			

## 表目次

第 1 表	北谷町遺跡一覧	9	第 7 表	遺物（井戸）観察一覧	32
第 2 表	墓層序一覧	23	第 8 表	生息場所別出土一覧	33
第 3 表	井戸層序一覧	23	第 9 表	巻貝出土一覧	34
第 4 表	遺物出土一覧	27	第 10 表	二枚貝出土一覧	34
第 5 表	遺物（墓）観察一覧	28	第 11 表	動物遺体出土一覧	35
第 6 表	人工遺物（墓）出土一覧	30	第 12 表	人骨出土一覧	36

# 第 I 章 調査の経緯・経過

## 第 1 節 調査の経緯・体制

### (1) 調査に至る経緯

本報告書は、国道 58 号北谷拡幅建設事業に係り緊急発掘を行った周知の文化財「クランモー（蔵毛・蔵森）」の調査成果をまとめたものである。

クランモーは、北谷町字伊平 224 番地 1 に位置する小高い丘と麓の広場一帯を指し、丘の麓には樹齢 300 年以上と伝わるウスクガジュマルや旧字伊礼集落の拝所、祖霊之墓が合祀されている。沖縄戦後、現在の北谷町域は全て米軍基地に接收され部分的に返還がなされてきた。平成 15 年 3 月には、在沖米海軍基地のキャンプ桑江北川地区（45.8ha）が返還されたが、同基地内にあったクランモーは昭和 57 年 5 月 14 日にいち早く返還されている。返還に際しては、戦後基地に土地を摂取された伊礼郷友会が米軍との土地賃貸借契約を拒否するなど、粘り強い返還要求を行い続けた結果実現となった。近年まで国道 58 号の北谷町謝苺交差点から嘉手納町旧嘉手納ロータリーにかけての約 8 km 間、国道 58 号以東に返還地があるのはクランモーだけという状態であったことから、郷友会にとって当該地が如何に重要な場所であったかがうかがえる。クランモー返還までの経緯及び返還後の整備については、旧字伊礼郷友会が発行している会誌<sup>(註 4・5)</sup>に詳しいので本稿では割愛する。

クランモー周辺には、伊礼原遺跡、伊礼原 B 遺跡、伊礼原 E 遺跡が存在していたが、いずれも緊急発掘調査が行われ、現在伊礼原遺跡の一部のみ現地保存されている。これらの遺跡は、先述のキャンプ桑江北側地区の返還に先立って実施した平成 7～9 年度の試掘調査によって発見された。キャンプ桑江北側地区は本町でも数少ない平坦地であり、かつ、地理的に本町の中心部であることから、返還以前から街の中核ゾーンとして職住近接型の都市環境の創出及び地域活性化を図る計画がなされていた\*1。国道 58 号に東接する同地区は国道よりも地盤が低く、大雨時に度々冠水していたことから、左記現象を解消するため盛土による造成工事が計画された。事業地内の造成高は一様でないものの埋蔵文化財に悪影響を及ぼす規模であり、同地区における埋蔵文化財は造成工事に先立ち緊急発掘調査を行うこととなった\*2。クランモーは区画整理事業地外にあることから記録保存の対象外であったが、平成 18 年度 4 月に国道拡幅計画が挙がり、拡幅が現実のものとなれば工事範囲に含まれることから記録保存の対象となる可能性が浮上した。

国道 58 号の読谷村～那覇空港間は地域高規格道路（沖縄西海岸道路）として、那覇空港～糸満市までの国道 330 号と共に平成 6 年に計画路線に指定されていたが、嘉手納町兼久～宜野湾市宇地泊間は未だ計画地が定まっていなかった。平成 18 年 5 月 23 日には、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（以下、「南部国道事務所」という）、沖縄県、北谷町による沖縄西海岸道路北谷道路と桑江伊平土地区画整理事業に関する連絡調整会議が開催され、以後継続して会議は催された。平成 18 年 9 月 18 日には、南部国道事務所主催による沖縄西海岸道路（北谷地区）の整備に関する住民説明会が開催され、平成 19 年 3 月 30 日には嘉手納・北谷・宜野湾地区が調査区間として指定されるに至った。

指定後、南部国道事務所は当該地におけるルート選定のための調査に着手し、平成 20 年 6 月 4 日付府国南事第 469 号にて北谷城について、平成 23 年 2 月 23 日付府国南事第 195 号において北谷町字浜川～字北前のおよそ 4 km 間に亘る文化財（クランモー含む）の有無について北谷町教育委員会へ照会を行った。町教育委員会は後者の照会について、平成 23 年 3 月 11 日付北教社 4228

号にて、既返還地には千原遺跡とクランモーが所在し工事の際には発掘調査が必要となること、未返還地においては文化財の有無が不明であるため試掘調査が必要である旨回答した。関係機関による会議及び住民説明会等を経て、平成 24 年度にはクランモーを現地保存することが非常に困難な様相を呈していた。伊礼郷友会員の心境は複雑なものであり、町教育委員会としても南部国道事務所に対しクランモーの地形を始め、ウスクガジュマル、拝所等の価値についてコンセンサスを図ったが、最終的には記録保存のための発掘調査を行う方向で調整を行った。

南部国道事務所は文化財保護法第 94 条第 1 項に基づき、平成 25 年 1 月 22 日付府国南事第 52 号「埋蔵文化財発掘の通知について」を沖縄県教育委員会教育長へ進達。沖縄県教育委員会教育長は文化財保護法第 184 条第 1 項第 6 号に基づき、平成 25 年 2 月 13 日付教文第 1904 号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」を伝達した。これと前後して、平成 25 年 1 月 17 日に『沖縄西海岸道路「北谷拡幅」建設事業に係る埋蔵文化財（クランモー）に関する協定書』を南部国道事務所と取り交わし、平成 25 年 2 月 21 日に「平成 24 年度国道 58 号（北谷拡幅・クランモー）埋蔵文化財発掘調査業務」の委託契約を締結した。平成 24 年度は域内の測量調査のみを行い、実質的な発掘調査は、平成 25 年度に伊礼郷友会が執り行う拝所や祖霊之墓の移転時期に合わせて実施することとした。

拝所の移転日が 8 月 17 日（土）と決まったことを受け、平成 25 年 8 月 1 日に「平成 25 年度国道 58 号（北谷拡幅・クランモー）埋蔵文化財発掘調査業務」の委託契約を南部国道事務所と締結。発掘調査に係る諸作業の軽減と調査の迅速化を図る目的で現地調査の一部を民間業者へ委託し、平成 25 年 8 月 13 日に現地調査に着手した。

\*1 返還に先立つ平成 10 年 3 月には、共同使用という形態で北谷町役場新庁舎がキャンプ桑江北側地区内に建設されている。

\*2 伊礼原遺跡（当時は伊礼原 A 遺跡、伊礼原 C 遺跡と呼称）も記録保存の対象であったが、縄文時代前期の古環境を想定できる低湿地区や自然災害に集落が見舞われた砂丘区が存在が明らかとなり、県内でも類例の無い遺物の出土が相次ぐなど、その重要性から平成 22 年 2 月 22 日に約 17,000 m<sup>2</sup>が国史跡に指定された。

## (2) 調査体制

平成 24 年度は測量業務のみを行い、発掘調査は平成 25 年度に資料整理は平成 27 年度に実施した。各年度の調査体制は以下の通り。

### 平成 24 年度

事業受託者	北谷町長	野国 昌春	
事業主体	北谷町教育委員会		
事業責任者	北谷町教育委員会	教 育 長	川上 啓一
事業総括	同	教 育 次 長	大城 操
事業総務	同	社会教育課長	嘉陽田朝栄
調査総括	同	社会教育課文化係長	米須 健
調査担当	同	主任主事	松原 哲志
委託業務	平成 24 年度北谷拡幅埋蔵文化財発掘調査業務委託 有限会社ムトウ測量設計		



## 平成 25 年度

事業受託者	北谷町長	野国 昌春		
事業主体	北谷町教育委員会			
事業責任者	北谷町教育委員会	教 育 長	川上 啓一	
事業総括	同	教 育 次 長	比嘉 良典	
事業総務	同	社会教育課長	比嘉 敬文	
調査総括	同	社会教育課文化係長	米須 健	
調査担当	同	主任主事	松原 哲志	
委託業務	平成 25 年度蔵森（クランモー）文化財発掘調査業務委託			株式会社パスコ沖縄支店

## 平成 27 年度

事業受託者	北谷町長	野国 昌春		
事業主体	北谷町教育委員会			
事業責任者	北谷町教育委員会	教 育 長	川上 啓一	
事業総括	同	教 育 次 長	佐久本盛正	
事業総務	同	社会教育課長	比嘉 敬文	
調査総括	同	社会教育課文化係長	米須 健	
調査担当	同	主任主事	松原 哲志	
委託業務	蔵森（クランモー）文化財発掘調査報告書作成業務委託			株式会社パスコ沖縄支店

## 調査指導及び助言（敬称略五十音順、所属は当時）

沖縄県教育庁文化財	田場 直樹、長嶺 均
沖縄県立博物館・美術館	藤田 祐樹
北谷町文化財調査審議委員	知念 勇
樹昌院	喜瀬 了心

## 聞き取り調査協力

旧字伊礼郷友会員 安次嶺 稔、幸地 清、幸地眞勇、国場英正、島袋 功、島袋孝則、  
島袋文栄、砂辺勝秀、田里有正、照屋 巖、仲村 啓、仲村文信、仲村文徳

## 第 2 節 発掘調査の経過

### (1)平成 24 年度

平成 24 年度は調査対象地内（692 m<sup>2</sup>）の測量を行った。クランモー以東は桑江伊平土地区画整理事業により造成が進み、更地となっている状態であった。平成 25 年 2 月 28 日、有限会社ムトウ測量設計と委託業務の契約締結。平面図、地形横断図、主要工作物の位置と写真を記録し 3 月 11 日には測量調査を終了した。



着手前状況（樹木部分がクランモー）

## (2)平成 25 年度

平成 25 年度は、拝所の移転及び字伊礼祖霊之墓と井戸の記録調査を行った。8 月 13 日、株式会社パスコ沖縄支店と委託業務の契約を締結。17 日には郷友会による拝所移転の経過をデジタルビデオカメラも用いて記録した。22 日、調査地内の草刈り及び移転された拝所（碑文）の拓本を行い、23 日クランモー帯のレーザー測量を実施。井戸の移転が 9 月 11 日になったことを受け、その間データ整理を行う。

9 月 11 日、新旧の井戸を「繋ぐ」儀式が伊礼郷友会により執り行われ、これによりクランモー内の全ての拝所の移転が完了した。翌 12 日からは字伊礼祖霊之墓及び井戸に設けられているコンクリート構造物の撤去を行い検出状況の図面作成を行う。13 日からは土層観察用のベルトを残しつつ墓室内の掘削に着手。17 日には井戸の断ち割を行い、18 日には断面図見通図を作成。19 日には墓室内のベルト掘削後、完掘状況の図面を作成し現地調査を終了した。



字伊礼祖霊之墓移転状況



井戸移転状況

## 第 3 節 整理作業の経過

### 平成 27 年度

平成 27 年 10 月 13 日 本遺跡の資料及び遺物整理などの室内作業をはじめた。

遺物台帳を元に出土地点を確認後、シールを作成し注記作業を行った。注記終了後は特徴的な遺物を選別し実測を行った。並行して分類、カウントなどを行い遺物の集計表を作成した。

11 月後半実測作業を終えデジタルトレースを行う。12 月 14 日トレース作業終了。

遺物写真の割り付けを作成し、写真撮影を行う。また、資料、遺物の精査をして、報告書執筆にとりかかった。

平成 28 年 1 月 18 日報告書執筆の傍ら、版下の作成に入る。2 月 12 日、文章、挿図、図版など取りまとめ割り付け作成作業を行なった。

2 月 19 日全ての室内作業を終了した。



実測作業状況



挿図作成作業状況

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### (1)位置と概要

クランモーが所在する北谷町は沖縄本島中部にあり、県庁所在地である那覇市から北東に約16km西海岸側に位置する。本町は、東西に4.31km、南北に5.91kmで、総面積は13.93km<sup>2</sup>である。北に嘉手納町、東に沖縄市、南東に北中城村、南に宜野湾市が隣接する。

クランモーは、現在の北谷町役場の北西側、国道58号沿いの海岸低地に位置する。調査区の標高は3m～7mで、小高い丘の麓に拝所や井戸の合祀所・殿等がある。戦後、米軍に接収されキャンプ桑江の敷地となっていたが、昭和55年の部落総会における蔵森拝所の返還要求決議やその後の粘り強い返還運動により、昭和57年に返還され、昭和59年にかけては復元工事が行われた。戦前の航空写真では、この地が屋敷地ではなく草木が多いことが分かるが、現在は、拡張された国道58号の一部となっている。この工事に先立ち、拝所や井戸の合祀所・殿等は、字伊礼郷友会館に移設された。

#### (2)自然的環境

北谷町の地形は、桑江断層を境に東側の段丘地形と西側の低地及び海浜から構成されている。北西-南東方向に連なる段丘崖が発達し、東から西へ階段状に低くなる海岸段丘を成している。段丘面は、町域東側に位置する標高100m以上の中位段丘上位面、町域中央部に位置する標高100～50m中位段丘下位面、町域西側に位置する標高50～30mの低位段丘面に区分される。段丘崖下には標高10m以下の海岸低地・海浜・人工埋立地が広がる。

町域北域には、石灰岩堤、カルスト地形である洞穴や石灰残丘、陥没ドリーネが見られ、白比川から南側では石灰岩堤が見られる。

主な河川には、町域南側を流れる普天間川と町域中央部付近を流れる白比川があり、概ね白比川を境に東側の台地の縁辺部に浸食により丘陵状を刻む浅谷(盆状谷)や小起伏丘陵などの起伏に富んだ地形が発達し、湧水や河川が見られ、白比川以北では「ナルカー」。「クシヌカーラ」、「ナガサ(徳川)」などが西流する。

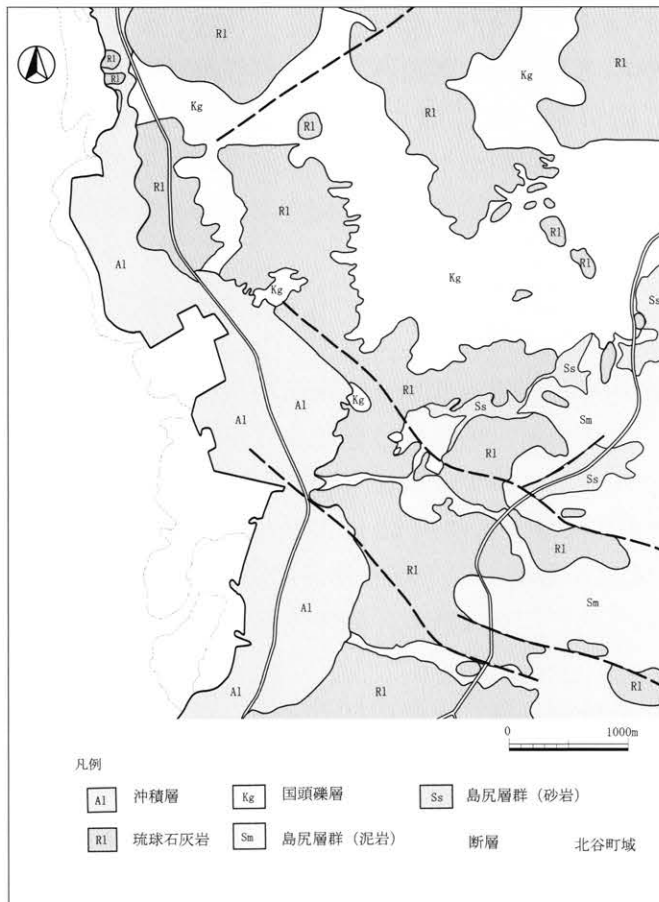
海浜には礁縁に沿って干瀬が堤防状に形成される典型的な干瀬とイノーの裾礁タイプのサンゴ礁が発達しており、海岸線に沿ってイノーが広がっていたが、現在では、公有水面埋立てや浚渫により住宅地・商業地域、漁港としての土地利用へと移り変わっている。また、海浜も人工ビーチ・護岸整備により自然の海浜は僅かである。

表層地質は、基盤の第三期島尻層群を不整合に第四期琉球層群が覆い、表層部はジャーガルやマージが堆積する。低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆い、沖積層は海成砂を主体とした海成層からなるが、表層部はジャーガルが堆積する。一部に島尻層群砂岩も見られる。琉球層群は石灰質の琉球石灰岩層と非石灰質の国頭礫層に区分され、琉球石灰岩層は沖縄本島中・南部、国頭礫層は沖縄本島北部に主に分布し、北谷町は、国頭礫層の南限となっており、沖縄本島南部、北部の性質が混在した地質となっている。そのため植生も北部に生育するイタジイ・イジュ・ヤマモモ等と、中南部に生育するアカギ・オオバギ・ヤブニッケイ等が台地・丘陵部に混生している。

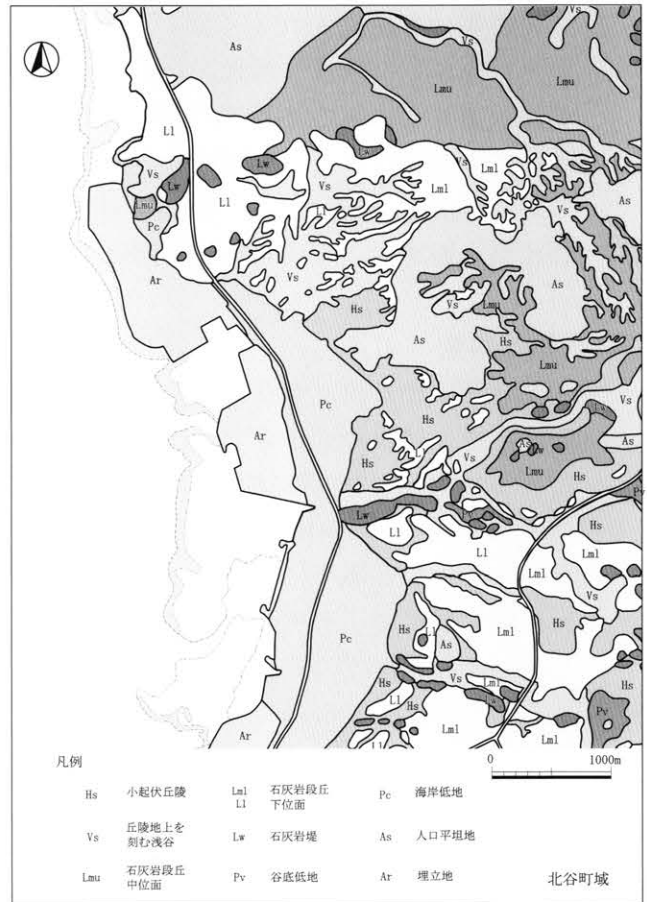
水利地質は、基盤のシルト質粘土層が不透水層となり、これを不整合で覆う琉球石灰岩層中

の砂質石灰岩が本町一帯に分布している。多孔質で透水性のよい石灰岩層が帯水層となり不整合部の各所で湧出している。

クランモーは、町域西側に広がる標高 10m以下の海岸低地上に位置し、石灰岩の露頭した微高地も見られる。表層地質としては、海成砂を主体とした沖積層が堆積している。北側にナガサ(徳川)、南側にクシヌカー、ナルカーが西流しており、戦時中の航空写真からも河口域のイノーに淡水の流入による深い切れ目が確認でき、水量が豊富な河川であったことがうかがえる。



北谷町の地質分類図



北谷町の地形分類図

上図は『土地分類基本調査 沖縄本島北部・中南部地域5万分の1』を一部抜粋し、改変・トレースした。  
(北谷町文化財調査報告書第 36集「伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡」より)

## 第 1 図 北谷町周辺地形・地層地質分類

## 第2節 歴史的環境

現在、町内で確認されている遺跡数は55件である。そのうち、1件は国指定史跡 伊礼原遺跡で、クランモーはこの遺跡の200m程南西に所在する。当該地域は、約7000前から現在に至るまで、人々の生活の痕跡が多く残されていることから、太古の時代より生活に向けた良好な環境条件が整っていたということが伺える。

以下に、本報告書で扱うクランモー付近の歴史的環境について概説する。

### (1) 先史時代

町内最古とされているのは、字吉原栄口原・桃原にある鹿化石出土地である。桃原区画整備事業の宅地造成工事に際して、道路切り通し壁面に現れた石灰岩露頭部の小さなフィッシャー（岩の割れ目）から、リュウキュウジカ化石骨が3片発見された。これを受け、その周辺部の踏査を行ったが、新たな遺物の発見はできなかった。（註1）

他に、国道58号の東側に所在する伊礼原遺跡・伊礼原E遺跡・伊礼原B遺跡があげられる。伊礼原遺跡は、ウーチヌカーと呼ばれる湧水を水源とした約7000年の生活の痕跡が確認できる貴重な遺跡である。伊礼原E遺跡では、沖縄において初例と言われる縄文施文土器が確認されたほか、縄文時代前期とされる土壌から熟年男性の頭骸骨等が出土した。

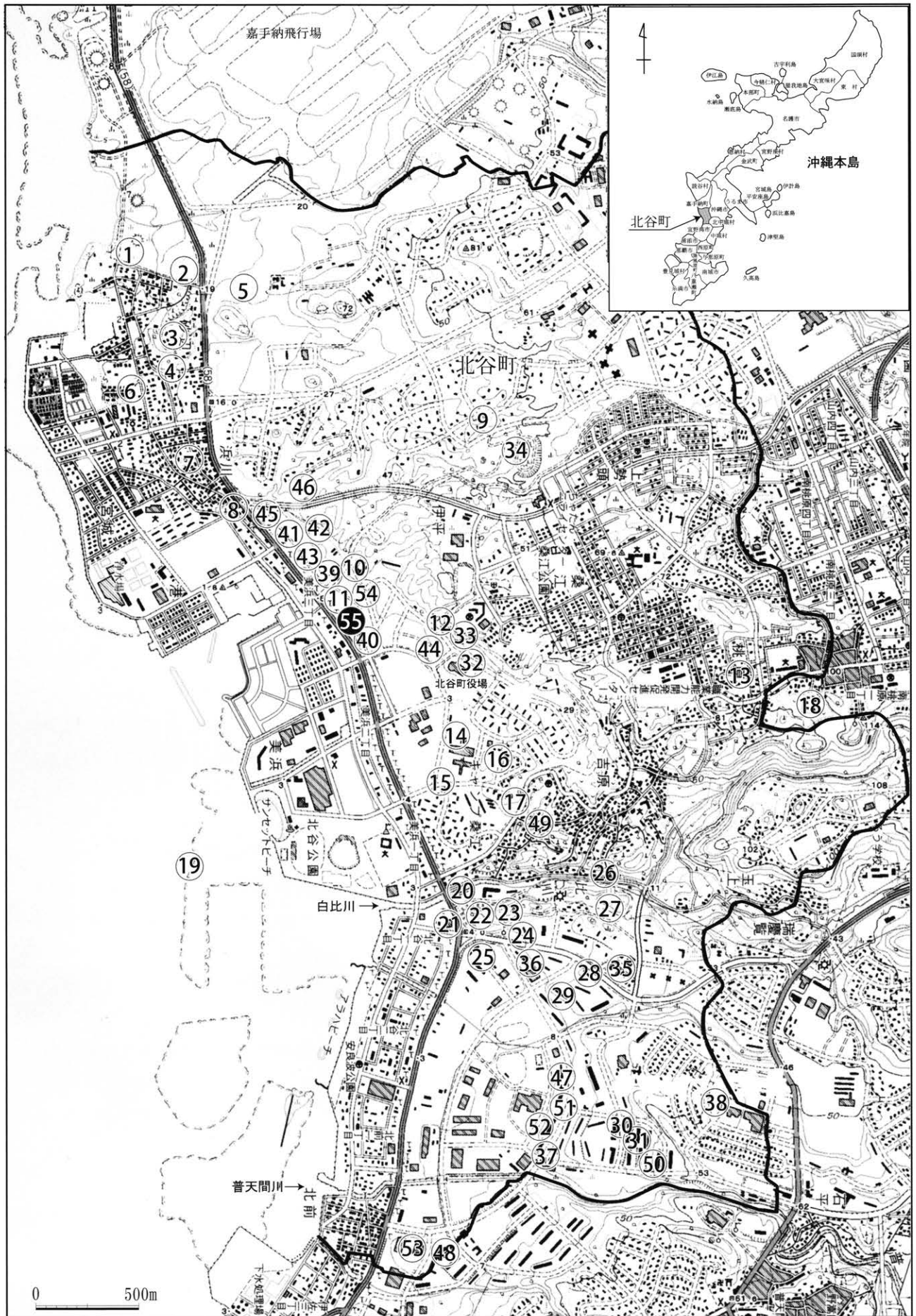
伊礼原B遺跡は、クランモーの北半分を含む位置にあり、戦前の伊礼の集落の範囲とほぼ重なる。1988年に、トクガー（徳川）の南東約600mに位置するナルカー（奈留川）を、トクガーに合流させる河川工事の際に発見され、同年調査が行われた。第2文化層であるⅧ層は枝サンゴからなる混礫砂層で、室川下層式～伊波式までの土器が確認できた（註1）が、後世の攪乱を受けていた。2002年に行われた、キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査でも、白砂層（ビーチロック）から室川下層式～グスク土器が出土し、同様に後世の攪乱を受けていること（註2）が確認されている。

### (2) グスク時代

当時代における顕著な例として、後兼久原遺跡・小堀原遺跡があげられる。後兼久原遺跡は、キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査で確認されていた。さらに、庁舎建設に係る文化財発掘調査により、グスク時代の掘立柱建物や砂鉄貯蔵穴に加え、木棺に埋葬された成人男性の人骨も確認された。鑑定によると、この男性の四肢骨の骨体が太く、特に右の上腕骨の太さと骨体の扁平性は特筆に値する（註3）ということで、鍛冶に従事していた可能性もあるという。同じ頃、沖縄県立埋蔵文化財センターによる近接地の調査でも、同時代の集落が確認されている。小堀原遺跡についても、後兼久原遺跡と同様にグスク時代の集落跡が確認されている。

### (3) 近世～近現代

伊礼原B遺跡では、2002年の試掘調査で、チンガーと呼ばれる井戸や、それに伴う敷石・洗い場遺構が発見された。これらは、戦前の字伊礼原伊礼209番地の島袋氏宅（屋号：樽チンミグラー）の所有であることが聞き取り調査で確認できた。当屋敷は伊礼集落の北西隅に位置し、地籍合併図とほぼ同位置に所在していた（註2）ことが確認された。小堀原遺跡では、ナルカー（奈留川）の護岸が発見され、耕作地や水田に利用していたと推測されている。



第2図 北谷町の遺跡

第1表 北谷町遺跡一覧

No.	遺跡名	時 期	所在地
1	砂辺(すなべ)サーク原貝塚	弥生～平安並行期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	縄文後期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	縄文後期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	弥生終末～平安並行期	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	縄文晩期	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	縄文前期～戦前	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんばるいわやま)遺物散布地	縄文晩期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	弥生終末～平安並行期	字浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせどくこぼぐん)	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・ 下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばる)遺跡	縄文早期～戦前	字伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	縄文前期～晩期・近世・戦前	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(くわえのとぅん)	グスク～近世	字桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
14	前原古島(めーばるふるじま)A遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	字桑江前原
16	伊地差久原(いじざくばる)古墓	近世	字桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	字桑江前原
18	桃原(とうばる)洞穴遺跡	縄文早期?	字吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
20	池(いち)グスク	グスク	字吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しらひがわ)河口遺物散布地	縄文前期	字北谷西表原
22	北谷城(ちゃたんぐすく)遺跡群	平安並行期～グスク	字大村城原
23	北谷城	平安並行期～グスク	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	弥生～グスク	字大村城原
25	北谷番所址	グスク	字北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらあがりぬちまたばる)遺物散布地	グスク	字吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる)古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる)遺跡	平安並行期～グスク	字大村玉代勢原
29	長老山(ちょうろうやま)遺物散布地	グスク～近世	字大村玉代勢原
30	大道原(うふうどうばる)A遺跡	グスク	字北谷大道原
31	大道原B遺跡	縄文晩期	字北谷大道原
32	後兼久原(くしかにくばる)	グスク	字桑江後兼久原・字桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	字桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いりーいーむいばる)遺跡	グスク	字上勢頭伊礼伊森原
35	後原(くしばる)遺跡	グスク～近世	字大村玉代勢原
36	塩川原(すーがーばる)遺跡	グスク	字北谷塩川原
37	稲千原(んにふしばる)遺跡	弥生並行期	字北前稲千原
38	横嵩原(よこたけばる)	グスク	字北前横嵩原
39	伊礼原D遺跡	弥生～グスク	字伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	縄文前期～近世	字伊平伊礼原
41	平安山原(はんざんばる)A遺跡	グスク～近世	字伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	弥生～近世	字伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	弥生～近世	字伊平平安山原
44	小堀原(くむいばる)遺跡	弥生～近世	字桑江小堀原
45	千原(せんばる)遺跡	グスク	字伊平千原
46	大作原(うふさくばる)古墓群	近世	字伊平大作原
47	東表原(あがりうむていばる)遺跡	縄文晩期	字北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばる)第2遺跡	縄文早期～近世	字北谷安仁屋原
49	東宇地原(あがりうじばる)古墓群	近世	字伝道原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	字北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	字北谷大当原
52	高畔原(たかぶしばる)水田跡	近世～戦前	字北谷高畔原
53	安仁屋(あにやばる)遺跡	グスク～近世	字北前安仁屋原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前Ⅲ期～貝塚後期	字伊平伊礼原
55	蔵森(クランモー)	弥生から平安並行期～戦後・ 近世～戦後	字伊平伊礼原

北谷町文化財調査報告書 第36集「伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡」(2014)の表1 北谷町遺跡一覧を改表  
 ※時代表記は概ね「グスク」→「10～17世紀前半」、「近世」→「17世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945年以前」

#### (4) 蔵森(クランモー)の概要

##### ①蔵森(クランモー)の起源と変遷

クランモーは、旧字伊礼集落にある祭祀場の一つであり、集落の南西部に位置し、小高い丘陵状の地形とその周辺の平場一帯の地域を示す(図版1)。丘陵部は琉球石灰岩が露頭し、自然洞穴が開口し、内部に人骨を納め、集落の合葬墓として利用されていた。平場には、獅子舞に使用される獅子頭が奉納される赤瓦屋の他、井戸も在り、ここで集落の行事が伝統的に行われていたということである。(註5:P9)

「クランモー」は、現在の漢字表記においては「蔵森」とされるが、「森」は「ムイ」と発音される場合が多いため、本来は「毛」をあてた可能性がある。(註5:P26)「毛」は「野原」を指す沖縄語であり、村落の人間が集まる場所として利用された。(註9:P515)ただし、「森＝ムイ」についても土地が高く盛り上がった地形を指すことから、この場所を示す表現としては妥当である。「蔵」については、①自然開口洞穴を移用した墓所があって、樹齢400年ともいわれるウシクガジュマルやその周辺の樹相が生み出す陰などから「クラ＝暗い」場所として認識されていた、②獅子小屋が在り、村の集会所であったことから「クラ＝倉(高床倉庫)」の在る場所とされた、等が考えられるが、いずれも想定の域を出ない。

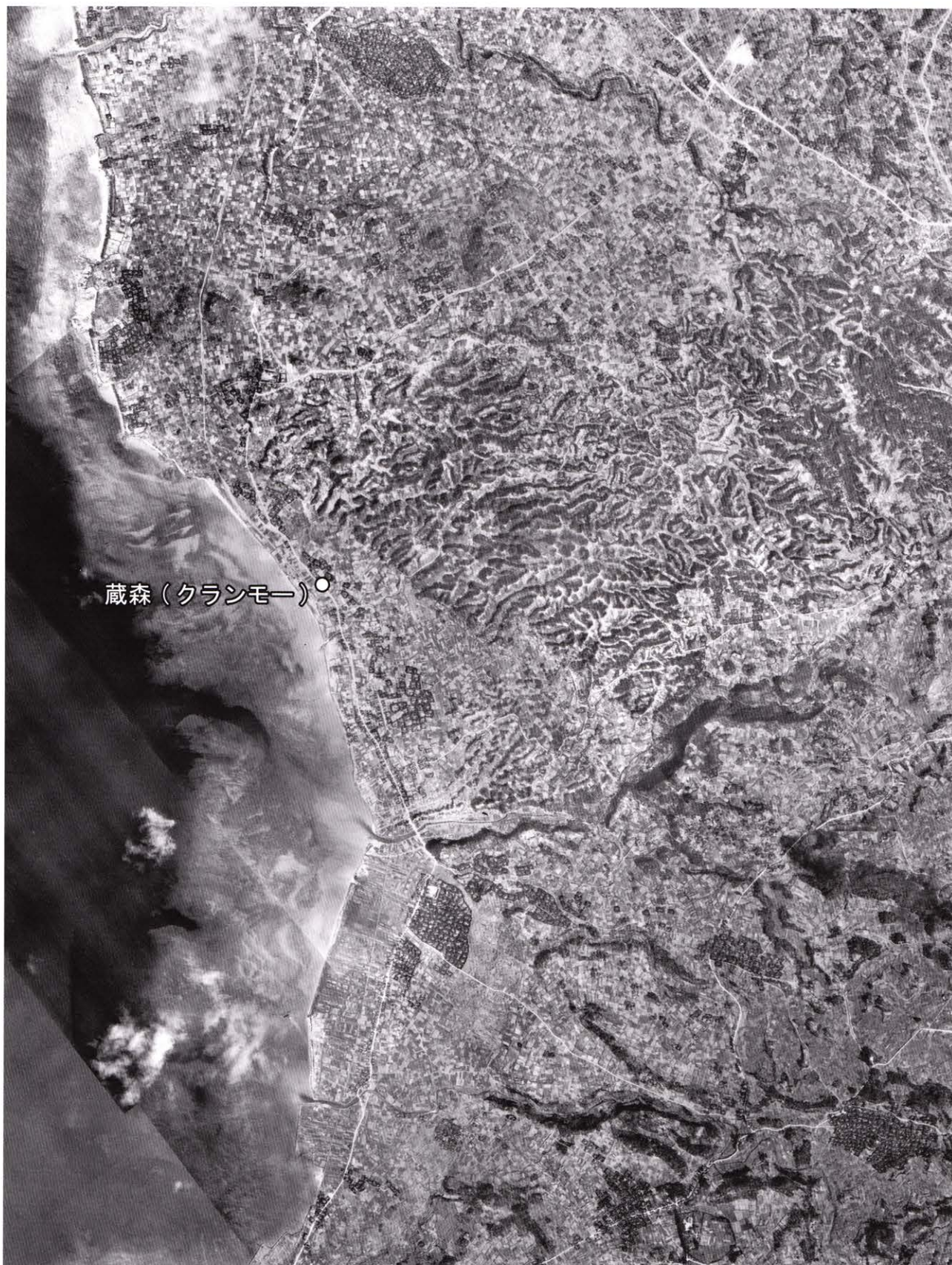
クランモーの始まりは不明であるが、伊礼集落との関連性からすると、伊礼集落の初源と時期を同じくするものと考えられる。伊礼集落は、18世紀初頭にはすでにその存在が確認されている(註10)。17世紀の中頃にまとめられた『絵図郷村帳』には「伊礼」が確認されないことからすると、伊礼集落の始まりは17世紀中頃から18世紀初頭に在るものと推測できる。よって、クランモーの起源についても少なくともそのあたりまでは遡れる可能性がある。

明治末期、社会の近代化に伴い、琉球王国時代より使用されてきた首里・国頭間の縦貫道路(中頭方西街道)の整備が行われ、クランモーにある丘陵の一部が道路の改修に影響を受けることになった。この道路改修工事の際、丘陵西側の鍾乳洞(位置不明)にあった5~6体の人骨を、字伊礼の人々が骨壺を購入して収骨し自然洞穴を利用して合葬した、という記録がある。(註4)丘陵の本来の大きさは、現在知ることは出来ないが、前述の内容からすると、西側へ丘陵が延びていたようである。現代においても、道路の拡幅のために丘陵は西側から少しずつ削平されてきているが、明治末期の道路改修工事の際にも同様に、丘陵の西側が削平されたものと考えられる。鍾乳洞については他に記述がなく、その場所や性格については不明であるが、5~6体の人骨が散在していたということからすると、明治末期より以前まで使用されていた洞穴墓である可能性が高い。

第2次世界大戦の後、北谷町においても多くの土地が接収され、在日米軍の管轄下に置かれた。クランモーも同様に、戦前の姿のまま基地のフェンスに囲まれ、自由な出入りが禁止された。その際、墓内部に葬られた骨壺については謝苜I区の仮墓へ移転され、返還まで集落の人々によって保管された。(註4)

昭和57年、旧字伊礼集落の人々による運動の結果、クランモーは返還が実現した。この返還に伴い、クランモーの往年の姿を取り戻すべく、復元工事が行われ、墓・井戸・各種石碑が在った場所に復元された。墓には骨壺が再び戻され、伊礼集落に暮らした人々の悲願は達成された。その後も、獅子舞いや様々な祭事の復興が行われ、クランモーを取り巻く伝統は、郷友会の精力的な活動を通して、現代へ受け継がれている。





図版1 戦前の航空写真（北谷町） 米軍撮影航空写真（1945年2月28日撮影：沖縄公文書館所蔵・加工、加筆）

## ②蔵森（クランモー）に伝わる蔵骨器・石碑・香炉・井戸の由来

今回の調査において、現存する石碑2点と香炉6点の拓本を作成した（第3図）。他、蔵骨器については写真により記録を行った。以下これに沿って、概要を記す。

### ■石碑

#### 「殿（とん）」（石材不明）

『琉球國由来記』卷十四 各處祭祀三の項に、「伊禮之殿」（註6）の記述があることから、その頃には、何らかの構築物があったと推定される。戦前、伊礼字の殿は新屋小の屋敷隣にあって、前には溜め池があり、樹齢400年以上のガジュマルの木が生い茂り、石の香炉が置かれ、平安山の祝女が白い着物を着て祭祀していた（註4）とされる。昭和57年の字有地、クランモー返還の際に、伊礼原217番地からクランモーへ合祀された。

#### 「字伊禮祖霊之墓」（久米島産石材）

昭和57年の復元工事の際、元の場所をコンクリートで遮蔽し、久米島産の石に刻銘（「字伊禮祖霊之墓」）し、安置した（註4）という。謝苺の仮墓の石碑の文字は「字伊禮開祖之墓」である。今回の移転に伴い「字伊禮拜所」とされた。

### ■井戸（香炉、石灰岩製）

現存する井戸は、返還後の復元工事の際に発見された井戸に、旧字集落に在った古い井戸（蔵森の井戸か？註4）のうち4基を勧請し合祀したとされている。

#### 「上間兼久の井戸」

戦前、屋取集落18軒があった。屋号タルーアワグラー（樽安和小）の南側の十字路に井戸（イーマガニクヌカー）があり、ウブガーとして使われたり、何かと集落の人が集まったりした（註7）。戦後米軍に接収され、昭和57年の字有地、クランモー返還の際に、伊礼原257-2番地からクランモーへ合祀された。

#### 「蔵森の井戸」

クランモーヌウブガーともいう。イリー（伊礼）のウブガーであった。グングウチウマチーと十五夜のとほなどに拝んでいた。（註7）

#### 「後の井戸」

アラカチヌカーともいう。屋号タサトゥ（田里）の北東角にあった共同井戸。（註7）

#### 「蔵森南井戸」

蔵森の南、クランモーと屋号カナーティーラグラー（加那照屋小）の間にあった。（註7）

### ■香炉（石灰岩製）

#### 「火の神」および「土帝君」

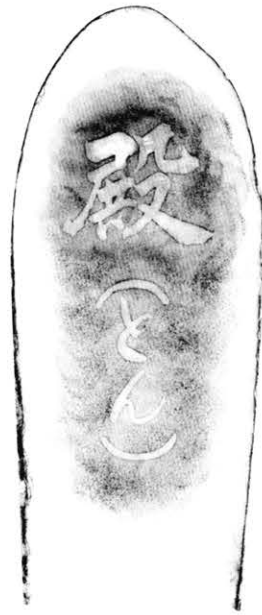
昭和57年の返還に伴い設置された。起源等は不明。（註8）

### ■蔵骨器（沖縄産陶製）

今回の調査に伴い墓室内で発見された厨子甕。明治末期に字で購入したものと考えられる。身は長頸で細身、ナデ肩で、表面にはマンガが塗布され、外見は黒褐色、内面は赤褐色を呈する。器高60cm、口径33cm、胴部最大径35cm程で、内部には中程まで骨が収納されている。蓋は高さ約16cmで、施釉状態や形状が身と異なる。



1



2



3



4



5



6



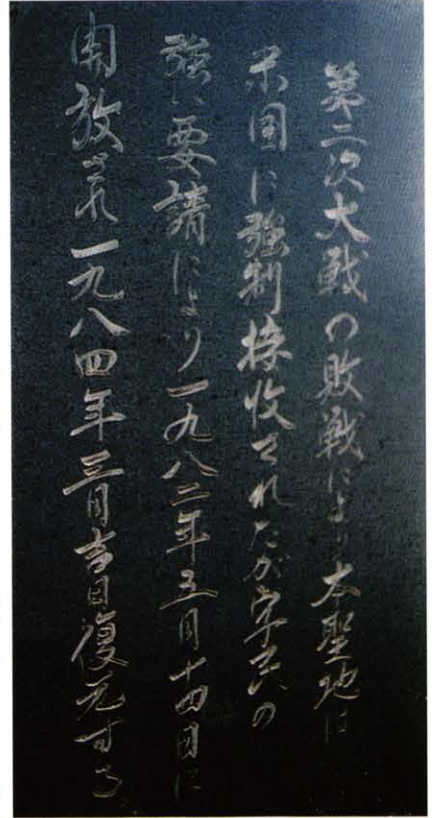
7



8

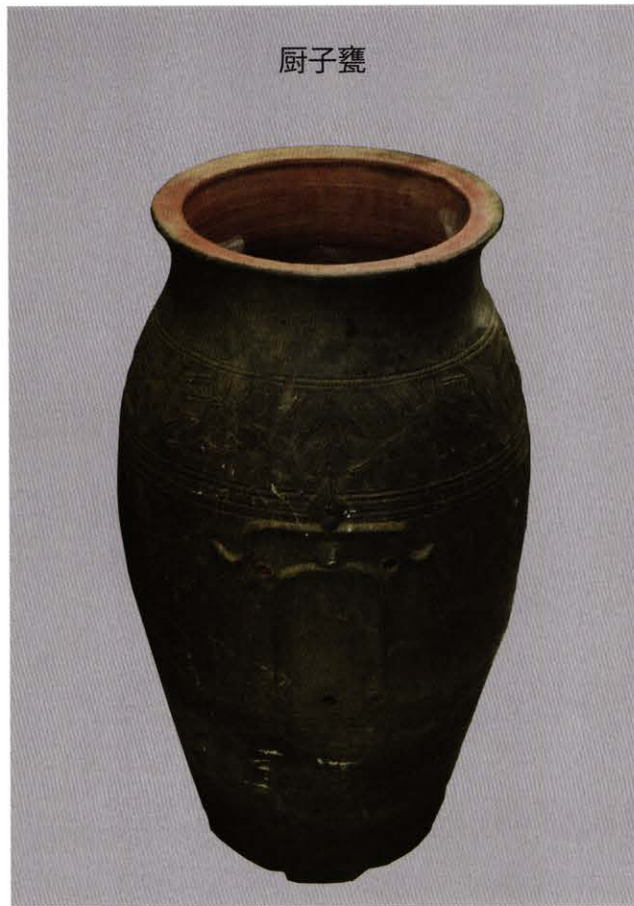


第3図 石碑・香炉の拓本

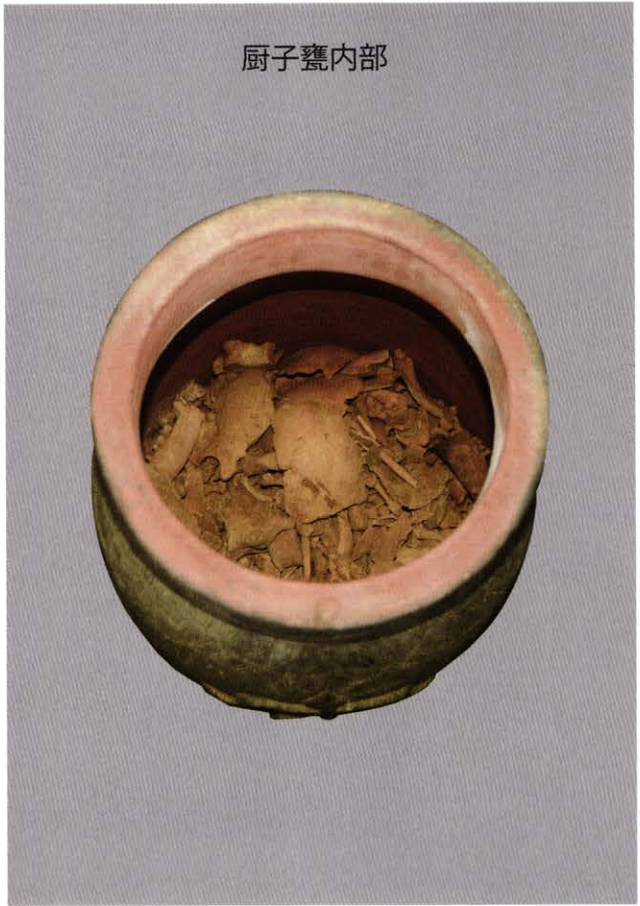


図版2 謝苺仮墓銘「字伊禮開祖之墓」

(註5 P51より転載)



厨子甕



厨子甕内部

図版3 蔵骨器

# 第Ⅲ章 調査の方法と成果

## 第1節 調査の方法

### (1) 調査の方法

調査対象地は、国道58号に隣接する米軍基地のフェンス内にあり、基地返還後においてもフェンスゲートが閉鎖されている状態である。フェンスの内側には、「字伊禮祖霊之墓」、「獅子小屋」、「産井戸（ウブガー）」等の旧字伊礼集落で祀られてきた数々の信仰の対象が、返還後に復元されており、現代においても「拝所」として伊礼の人々に親しまれている。今回の調査では、国道拡幅建設事業に伴い移設が必要となった拝所の「字伊禮祖霊之墓」および「産井戸（ウブガー）」の移設の記録と、埋蔵文化財調査を行う。

調査対象となる、墓および井戸は、その構造が地上に露出した状態にあるため、調査方法としては、従来の試掘調査で使用している30mメッシュのグリッド設定による調査区設定を踏襲せず、各構造物の残存状況および構造軸線を鑑み、任意にセクションポイントを設定し、掘削・記録を実施することにした。

墓と井戸は、返還後の復元工事により地上露出部分がコンクリートで直接被覆されており、その上をコンクリート製上屋によって保護されている。調査はまずこのコンクリートを撤去することから始まった。コンクリート上屋の撤去には重機のインパクトを使用し、調査員の指示のもと遺構に影響が及ばないように慎重に割り取りを行った。遺構の直上に付着したコンクリートについては、手ノミなどを使用して取り除き、遺構検出作業を行った。コンクリートの割り取り作業の際には、国道側の歩道および車道にコンクリートの破片や粉塵が飛沫しないように、散水・清掃を繰り返しつつ作業にあたり、周辺環境への配慮を十分に行った。これらの撤去作業の後、調査区の設定を行った。

墓入口は自然岩盤で、幅約2.5m、高さ約1.1m、奥行き約2.7mにわたり開口していることが確認された。墓は北北西に向かって開口していることから、この軸に沿い、なおかつ奥行に対してなるべく最深部付近まで届く部分に主軸となるセクションポイントを配置し、調査区を設定した。この主軸に沿って墓の奥行き方向に幅20cmの土層観察用ベルトを設定し、ベルトを挟んで両側について人力掘削を行った。自然岩盤内部の作業ということでもあり、作業員のヘルメット着用の義務や岩盤洞窟外部からの目視による作業状況の確認等、作業員の安全確保には特に留意した。

井戸は、地上開口部の直径約1メートル、深さ3.0メートル以上（喫水線以下を含む）である。地上からの観察の結果、石積みは積み方がやや粗く、内部での作業は危険であると判断した。このため、内部の記録については井戸を周囲の土壌ごと重機で半裁したのち、土層断面および石積みの見通しについて観察を行うこととした。井戸周辺の掘削深度が深く、立ち入りが危険な為、作業期間中は周囲に鉄製支柱とロープをもってバリケードとし、毎日の作業終了時には金網と板で開口部を覆い、落下事故防止対策を行った。

計測については、調査対象が地上立体構造物であることから、従来の手記による実測方法に加え、写真測量を応用した計測および3次元地上レーザースキャナーを使用した計測を併用して行い、立体形状の把握を行った。地上レーザースキャナー計測成果は、墓の正面・立面および断面図の作成に使用した。



図版4 蔵森 (クランモー) 周辺航空写真

+

X:35720  
Y:25740

+

X:35740  
Y:25760

+

X:35700  
Y:25760

+

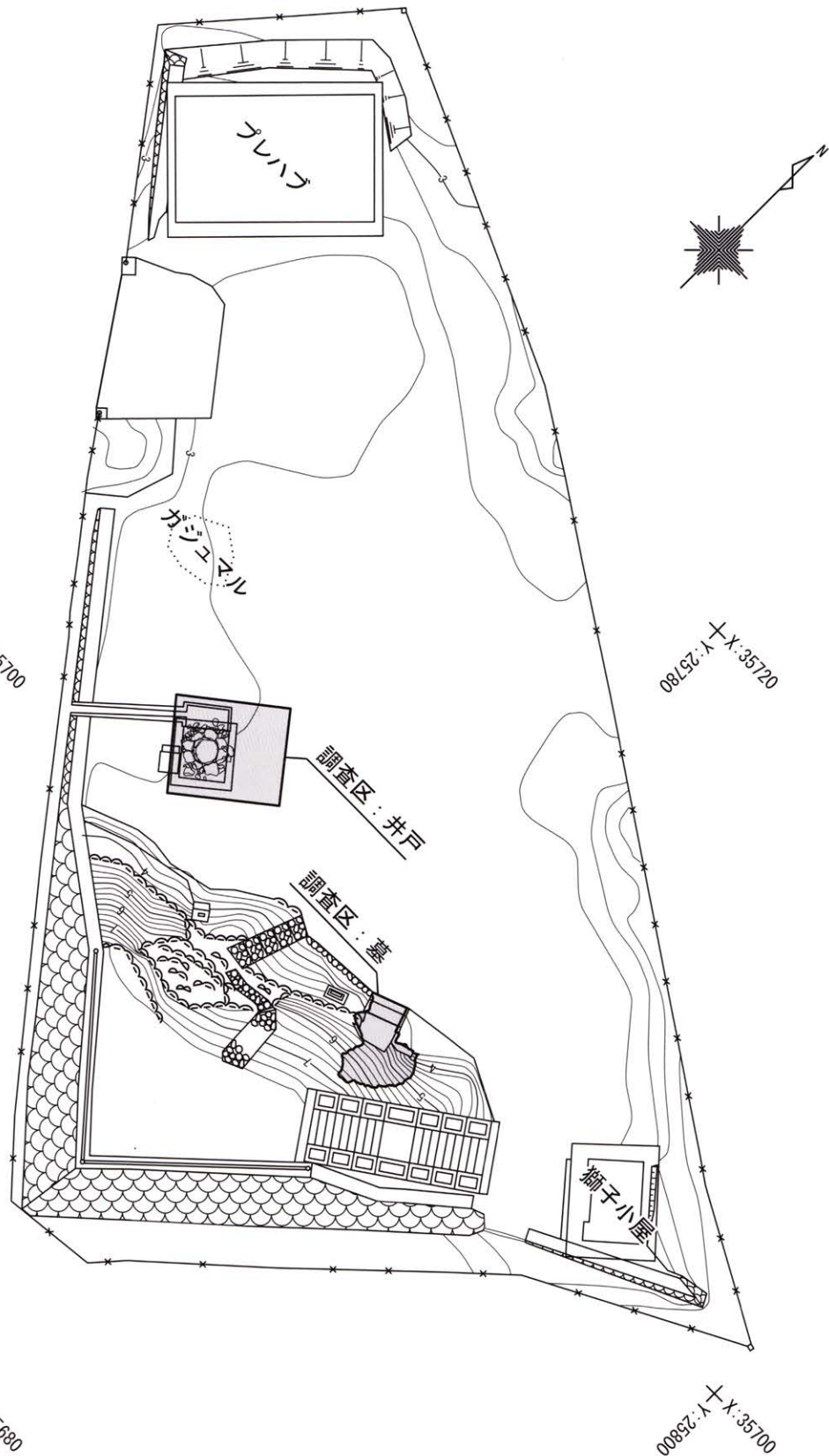
X:35720  
Y:25780

+

X:35680  
Y:25780

+

X:35700  
Y:25800



第 4 図 調査区設定位置図

## (2) 拝所移転記録

### ①墓の移転作業記録

墓の移転は平成 25 年 8 月 17 日（土）、伊礼郷友会より会長の照屋氏ほか 10 名の会員の方々および新郷友会館の設計担当者である志喜屋氏（松島設計）が出席し、執り行われた。移転記録については、北谷町教育委員会社会教育課の松原が行い、株式会社パスコがこれを補助した。移転作業当日までに、香炉と石碑はすでに移動されており、その元位置についての確認は取れなかった。

#### ■午前 10 時（干潮）：墓口の開口

墓の開口に先立ち、集合した関係者が御願（ウガン）を行う。墓移動は、当日の潮汐の干満に合わせて行わなければならないということであり、それに従い開口を行った。

墓の内部は自然地形が残っており、厨子甕が 1 基安置されていた。記録によると、明治 38 年の県道改修工事にクランモー西隣の鍾乳洞に散在する人骨を、新たに骨壺を買い求め合葬したとあることから（註 4）、厨子甕はこの骨壺に該当すると考えられる。

厨子甕の取り出しは、午後に行うことになっているため、午前中は墓の開口のみとし作業を終了した。作業終了時、開口した墓口に、何も書いていない白いままの習字用の半紙を貼り付けた。郷友会員の仲村氏によると、人の魂が吸い込まれることを防ぐため、という。一種の结界のようなものであると考えられる。

#### ■午後 15 時 30 分：法要・厨子甕取り出し

法要は、北谷町にある臨済宗妙心寺派樹昌院の喜瀬了心住職に依頼し、墓前には果物・泡盛・お茶・寿司を供物として準備を行ったほか、墓と同じく移転される予定の郷友会所有の獅子頭についても同時に誦経を依頼した。

誦経が終了すると、厨子甕の取り出し作業へ移った。厨子甕は、墓口よりも器高が大きいため、傾けつつ慎重に取り出した。

厨子甕の中には、細かい骨片が中程まで詰められ、その上に肋骨・趾骨が置かれ、最上部に頭骨と下顎骨が納められていた。歯のすり減り方から大人と推察される。性別・時代については不明である。厨子甕を取り出した跡に、他に遺物は見られなかった。

#### ■午後 16 時 00 分（満潮）：新郷友会拝所への納骨

厨子甕と獅子頭をトラックへ乗せ、新しい拝所へと移動。納骨は満潮時である夕方に行った。

新しい拝所の納骨堂の収納寸法に対して厨子甕が大きく、厨子甕の蓋を身に乘せた状態では収納ができないことが判明した。厨子甕の蓋をしない状態のまま、納骨堂の蓋を閉じることとなった。閉じた納骨堂の前に「土帝君」と「火の神」の香炉を、写真資料（註 5）をもとに、位置を確認し設置した。その後、泡盛・果物・お茶を供え、誦経し法要を終了、旧墓に戻り後片付けを行い、墓の移転作業を完了した。





1. 墓の開封作業



4. 新墓への納骨作業



2. 旧墓での法要の様子



5. 蔵骨器納骨状況



3. 蔵骨器取り出し作業



6. 新墓での法要の様子

## ②井戸の移転作業記録

井戸の移転は平成 25 年 9 月 11 日に行われた。『旧字伊礼郷友会誌』によると、この井戸は、昭和 58 年の蔵森復元工事の際に掘り出され、字伊礼に存在した家々の井戸のうち、良質であった 4 つの井戸が合祀されているということである。この度、新郷友会館の拝所に隣接する新しい井戸の完成に伴い、新旧井戸を「繋ぐ」儀式を執り行うことになった。出席者は郷友会長の照屋氏ほか 4 名の郷友会員で、記録は北谷町教育委員会社会教育課の松原と株式会社パスコが行った。

### ■午前 10 時 30 分：旧井戸の御願・取水

旧井戸の前に郷友会員が集まり、御願（ウガン）を行う。井戸の縁に 2 つ折りにした習字用半紙を 4 箇所横に並べて敷き、それぞれその上に線香を供え、郷友会長の照屋氏が祝詞をあげ、御願を行った。4 つの線香を供えたのは、合祀された 4 つの井戸それぞれにお供えするためである。その後、紐を括り付けたペットボトルを井戸へ投げ入れ、井戸水を取水した。水は透明で濁りはほとんどなく、無臭であった。お供えした線香はそのままに残し、取水した旧井戸水を持って、新井戸へ移動した。

### ■午前 11 時 00 分：新井戸の御願・取水・散水

新井戸は、コンクリート製の平葺き上屋に水槽が設けられており、すでに落成し、水をたたえている。井戸の奥側には事前に旧井戸より移した、合祀されている 4 つの井戸の香炉が設置されていた。この香炉にそれぞれ 2 つ折りの習字用半紙を複数枚敷き、線香を供え、御願を行った。

御願は郷友会長により行われた。前段のお祈りののち、まず新井戸水をペットボトルで取水し、一礼をしたのち、持ってきた旧井戸水を新井戸へ流し込み、再び御礼のお祈りをして新井戸での御願を終了した。

今度は取水した新井戸水を持って、再び旧井戸へと移動した。

### ■正午 0 時 00 分：旧井戸の御願・散水

旧井戸へ戻り、再び御願を行う。先に出る際に供えた線香はそのままの状態に残っており、この状態でお祈りを捧げ、持ってきた新井戸水を旧井戸へ注ぎこみ、一礼をして御願を終了、井戸の移転を完了した。

井戸の移転の完了をもって、クランモーの拝所の機能は全て新郷友会館へ引き継ぎされたということになる。

井戸の移転は、古い井戸の閉鎖に対する御礼と新しい井戸に対する願掛けという祭事を執り行う行事であるが、今回の一連の作業から、新旧の井戸を「繋ぐ」儀式でもあると推察される。「繋ぐ」には、新旧井戸の水を相互に交換するという儀式方法によって行う。この間は相互の繋がりを保持しておかなければならないという観点からか、供えた線香等は全ての祭礼が完了するまでは撤収しなかった。



1. 旧井戸での御願の様子



4. 新井戸での御願の様子



2. 取水作業



5. 旧井戸への散水作業



3. 新井戸での散水作業



6. 移転完了後（墓・井戸）

## 第2節 遺構

### (1) 墓

旧宇伊礼の南西部にある石灰岩が露頭する小丘陵の北側斜面に位置し、自然岩盤にあった洞穴を利用して作られた、いわゆる「掘り込み墓」である。

墓の前面は流し込みのコンクリートによって成形され、一見すると平葺墓の形状を呈する。墓口部分は厚さ約 10cm 程度のコンクリート板製蓋によって閉じられており、蓋の前に石製の香炉が安置されている。香炉の前は奥行が約 60cm、幅約 150cm ほどの広さでコンクリートによる段が作られており、参拝時に供物を置くための台（＝サンミデー）としての機能を有している。これらの構造物は、昭和 57 年の返還に伴う復元工事の際に建造されたものであるため、これを除去したうえで調査を行なった。

墓口は幅約 2m・高さ約 1.2m 程度の広さで、北北西方向へ開口する。庇となる部分は復元工事の際にコンクリート部材との親和性を図るため、一部がはつられ平坦に成形されている。「頭骨(チブルブニ)が見える開墓(アチバカ)などの古い洞穴があって・・・」(註5)との記述があることから、少なくとも戦前までは開口した状態が普通であったと想定できるが、現在では骨は全て蔵骨器に納骨されているため、開口部から頭骨は観察できない。岩盤は、石灰岩と砂岩の互層になっており、砂岩は軟質で掘削が容易である。墓室の天井部には、奥行き方向へのハツリ痕が観察できる。墓を築造する際の整形したものと思われる。

墓室は開口部を最大高として、奥へ行くに従い天井高が低くなっている。開口部付近は、天井を整形しているが、墓室の奥はほぼ自然岩盤が露出しているように伺える。自然洞穴の入り口部分に手を加えて、墓として利用したと考えられる。墓室内の床面の平面形状は約 4 m<sup>2</sup>の平場になっており、表面には戦後米軍に由来すると思われる現代遺物が散在している。墓庭(コンクリート製階段の下部)は、戦後米軍による造成を受けているため、形状の把握はできない。本調査では、墓の床面と堆積状況を確認するため、墓庭から墓室内にかけて土層観察用ベルトを設け、墓室の全てと墓庭部の半裁掘削を行った。

調査の結果、最下層の岩盤を含め 7 層の土層堆積を確認できた(第 2 表)。墓室は、1～3 層はビニール製品などの出土遺物から戦後の攪乱層と判断した。4 層は、墓室入口付近と墓庭一部にのみ見られる枝サンゴが混じる、締りの弱い砂礫層である。5 層は墓口の外に堆積しており、4 層と似ているが、小礫と粘質土の混入が多く締りがやや強い。4・5 層からは、同一個体(接合可)の厨子甕の蓋破片(第 8 図 3)が出土していることから、同時期の堆積層と考えられる。同層からは本土産磁器(第 9 図 3・4)・赤瓦(第 9 図 6)の破片が出土している。6 層は墓室内岩盤の直上に堆積する、枝サンゴが混じる締りの弱い砂質土層で、層厚は薄く深いところでも 10cm 程度で岩盤に到達する。遺物は最も少なく、骨類および貝類が占め、人工遺物は出土していない。骨はヒトの他、イヌ・ネズミ・トリ等、種類が多様で混在している。貝は海産二枚貝が多いが、これも種類は雑多である。

6 層出土人骨については、3 個体を選別し炭素 14 年代測定法による理化学分析を実施した。その結果、最も古いもので BP1385±40 年という結果がえられた。これについては、墓の移転記録に照合すると、「5～6 体を他から合葬した」という記述があることから、単純に墓の下限年代に置き換えることはできない。しかしながら、クランモーの成り立ちを考えるうえでは看過出来ない結果であるといえる。

第2表 墓 層序一覧

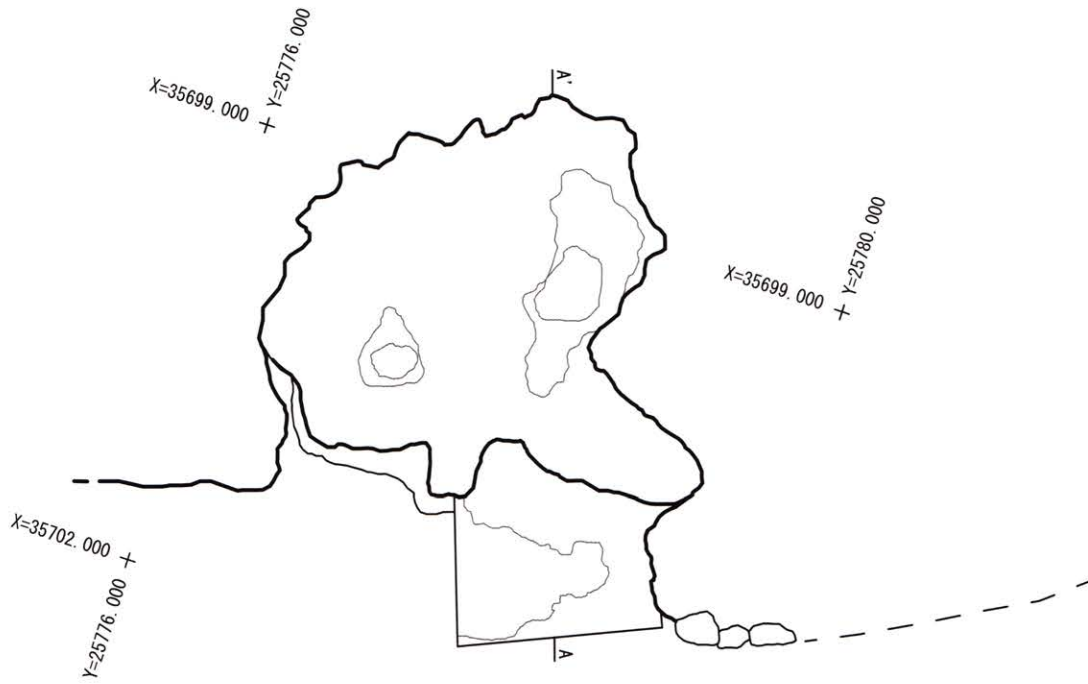
層序	色調	記号	土質	備考
1	明赤褐色土層	5YR 5/8	造成土。締りやや強い。粘性あり。砂質含む。小礫含む。墓外に堆積。	
2	灰褐色砂質土層	7.5YR 4/2	締り弱い。小礫が混じる。墓室内に堆積。	
3	褐色土層	10YR 4/6	締りやや強い。砂質混じり。下部でコーラルが一部混じる。更に下部でビニール片が出土。改修前後の堆積か。	
4	にぶい黄褐色砂層	10YR 5/4	締り弱い。砂質強い。小礫、枝サンゴ混じり。	
5	にぶい黄褐色砂層	10YR 4/3	締りやや強い。小礫が多く混じる。石段下に堆積。本土産磁器などの遺物が出土している。墓室側は岩盤となる。	
6	灰黄褐色砂層	10YR 4/2	締りやや弱い。小礫、枝サンゴ混じり。岩盤直上に堆積。プライマリーの可能性がある。骨片が出土している。	

第3表 井戸 層序一覧

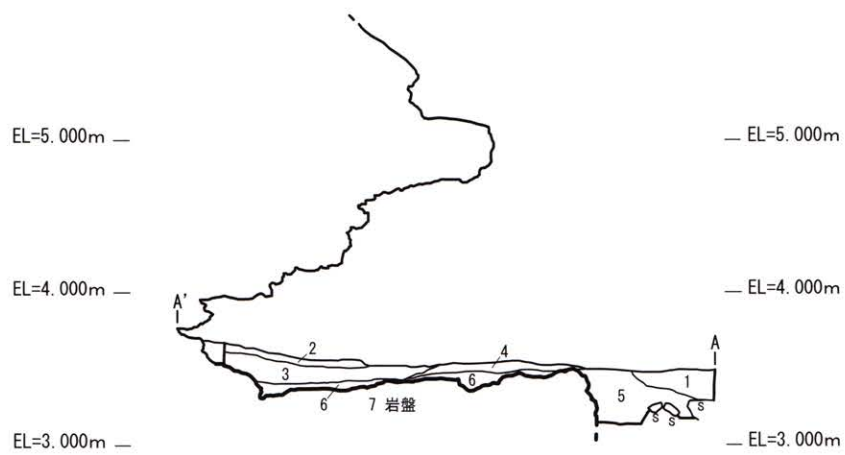
層序	色調	記号	土質	備考
1	明赤褐色土層	5YR 5/8	造成土。締りやや強い。粘性あり。砂質含む。小礫含む。墓外に堆積。	
2	明黄褐色砂質土層	10YR 7/6	砂層。しまり弱い。アスファルト、ガラス片などが混じる。戦後造成土。	
3	淡黄色コーラル土層	2.5Y 8/3	コーラル層。締り強い。戦後造成土。	
4	にぶい黄褐色砂層	10YR 5/4	しまり弱い。礫混じり。ガラス片などが出土。戦後造成か。	
5	5a: にぶい黄橙色砂層	10YR 6/3	しまりやや弱い。小礫が多数混じる。西側へ傾斜。造成土と思われる。	
	5b: にぶい黄色砂層	10YR 5/3	しまりやや強い。粘性あり。砂質はやや粗い。礫は少量。	
6	黄褐色砂層	10YR 5/6	しまりやや強い。やや粘性あり。下部よりコンクリート片あり。戦後造成か。赤瓦出土している。	
7	褐色砂層	10YR 4/4	しまりやや強い。やや粗い。礫(細)混じる。角で鉄板を確認。戦前～戦後頃か。	
8	にぶい黄褐色砂層	10YR 5/4	締りやや弱い。1cm大の赤土ブロックが混じる。少量礫あり。	
9	淡黄色砂層	2.5Y 8/3	締り弱い。白砂層。砂質は細かい。11層に類似。	
10	褐色～にぶい黄褐色砂層	10YR4/4～5/4	締りやや強い。下部は砂質。8～10層は断ち割りの北東角にのみ堆積。攪乱の可能性ある。	
11	淡黄色砂層	2.5Y 8/3	締り弱い。細砂層。無遺物層でプライマリーな堆積(自然)と思われる。	
12	灰白色サンゴ砂利層	2.5Y 8/2	締りやや弱い。枝サンゴ、小貝を含む。砂質はやや粗い。海砂か。	



正面図



平面図



断面図



第5図 遺構(墓)実測図

## (2) 井戸

開口部が直径約 1mの円形掘り抜き井戸である。調査時も滞水しており、土地の水量の豊かさが感じられる。クランモアの井戸は、戦後の土地接收の際、米軍による造成工事のため埋め立てられてしまったものの、返還後の復元工事の際に掘りだされ、集落に存在したクランモアの井戸を含む 4つの古い井戸を勧請し合祀したということである。(註 5)

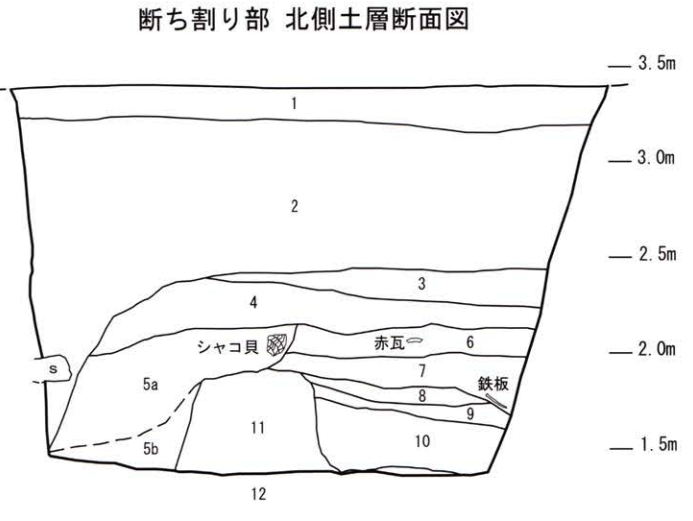
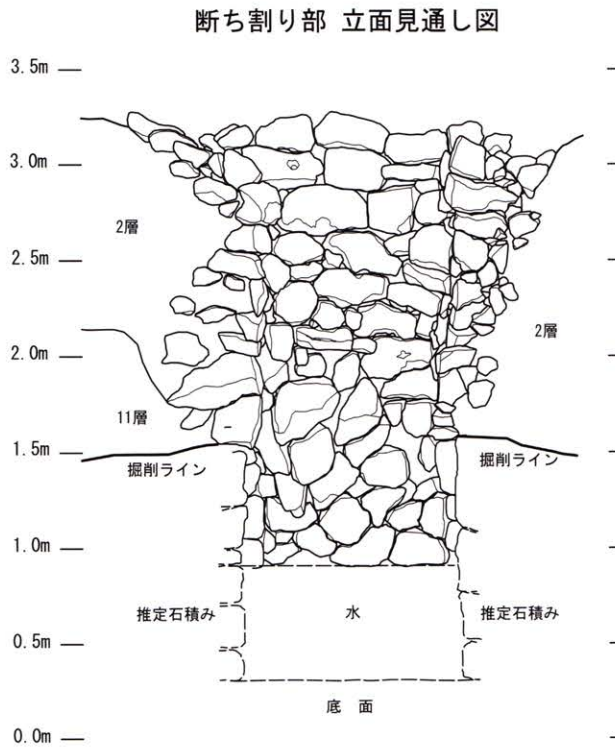
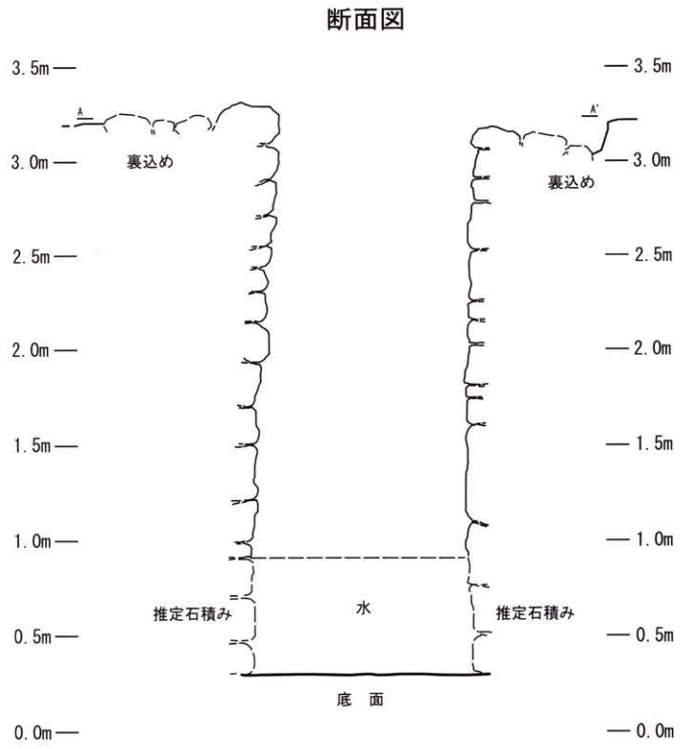
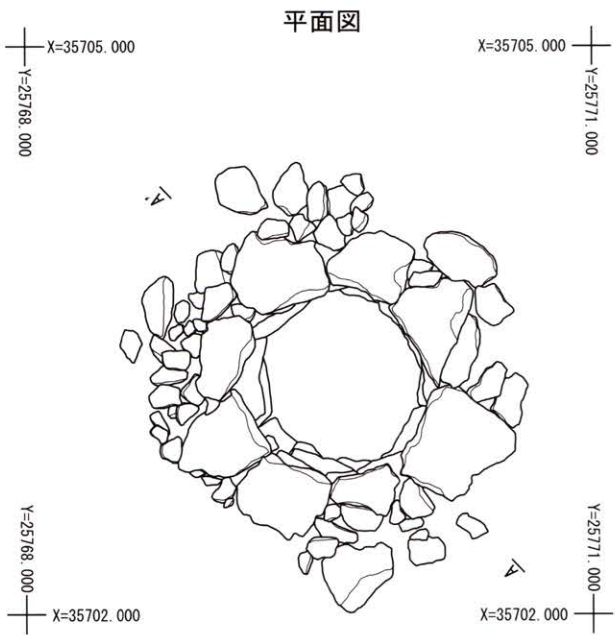
復元工事では、接收後に埋め立てられた井戸を掘り出すために、地表からかなりの深さまで掘削した様子が写真資料で伺える(註 5)。調査時には地上から 30cm程の高さまでコンクリートで型枠流し込み成形により、井戸の縁が作製されていることから、復元工事において地表からある程度の高さまでは、新たに石積みを積み直している可能性がある。このため調査に先立ち、コンクリート被覆をすべて除去し、井戸の石積みが露出し遺構の状況が確認できる面まで、調査区全体の地表の掘り下げを行った。

検出した井戸石積み平面形は円形状を呈している。井戸口を構成する石には 40cm程度の大きさの石灰岩の一面を平面に加工したものを使用し、加工面を井戸の内側にして敷き並べている。内部の石積みについても、井戸口のものと同程度の加工石を使用しているが、石の噛み合いや積み方からすると、かなり粗雑な印象を受ける。石積みの周囲には 10~20cm大の不定形の裏込め石が 30cmの幅に入れられ、隙間を土やコンクリートで充填している状況が伺える。

井戸の深さは、石積みの天端から約 3.1mで常時水が 60cm程度に溜まっている。井戸水は調査の妨げになるためポンプによる排出を試みたが、湧水量は多く、水位がすぐ回復してしまうため、完全な排水は諦めざるを得なかった。このため内部での作業は危険と判断し、平面状況を記録したのち周囲の覆土ごと重機による断ち割りを実施した上で、石積みの状況と土層断面の確認と記録を行うことにした。

断ち割りは内部の状態が比較的良好な西側を残し、東側半分について行った。その結果、石積みの天端から深度 2m程までは戦後の復元工事に関わる、コンクリート片などの現代遺物を含む造成土 1~10層が厚く堆積していることが判明した(第 3表)。造成土は、深度 2mにある地山と考えられる淡黄色砂層(11層)の直上まで達しており、これより上層にある石積みは全て復元工事に伴うものであり、本来の井戸の石積みは 11層より下層にしか残存しておらず、水面から上へ 2段程度である。これからすると、石積みの総残存量は、水面下に 60cm程度、井戸底面から上へ 1m程までであったと考えられる。ただし、水面下については未排水のため、確認は出来ていない。

水上部分に確認できた残存部の石積みは、面が円状の井戸の平面形に沿うように弧状に加工されており、積み方は野面積みではあるが、戦後の石積みに比べ積み方が丁寧であり、石の間隙は少ない。また、長年の水の浸食の影響を受け石材の表面は稜が取れ、滑らかになっている。これらの状況は水面下についても同様に見受けられる。残存部分の裏込めの状況や井戸の掘り方、石積みの詳細構造の確認については、断ち割り掘削深度をさらに深くする必要があったが、すでに調査区の掘削深度が 2mを超えている上に、地山が砂層であること、また足場地面が湧水の浸透により脆くなっていることから、崩落の危険性があるため、これ以上の掘削作業については断念し、記録作業を行い調査終了とした。



第6図 遺構（井戸）実測図



### 第3節 遺物

本遺跡では、沖縄産陶器、本土産磁器、瓦類、ガラス破片等の人工遺物と動物・貝類遺体の自然遺物が出土している。人工遺物の総数は225点で、内訳は沖縄産施釉陶器9点、同無釉陶器11点、陶質土器3点、本土産磁器6点、陶製品1点、瓦・レンガ24点、ガラス片等147点、金属片11点、石類4点、炭化物2点、プラスチック・ゴム・セメント等7点。自然遺物は、動物遺体21点、貝類遺体42点であった（第4表）。以下、遺構別に人工遺物の出土状況について記す。

第4表 遺物出土一覧

出土地点	種類	沖縄産		本土産		陶製品	赤瓦・レンガ	ガラス類				金属製品	石類		炭化物	現代物			人工遺物合計	自然遺物			
		施釉陶器	無釉陶器	陶質土器	磁器			瓶完形	瓶口縁	瓶底部	破片		軽石	礫		プラスチック	ゴム	セメント		動物遺体	貝類遺体		
墓	墓室内	1層					1	1		1	142	10		1	2	5	1	1	165	189	2		
	墓室 西側	1層		1	1		9		1										12			9	
	墓室 東側	1層		1	1	1	4												7		12	11	
	墓室内ベルト	1層			1		2			2									5				
	墓室 西側	3～4層	2	2			1					1							6				
	墓室 東側	3～6層																	0		1	9	
	墓室 西側	4～6層																				3	
	階段下 西側	5層		2				7											9				
	階段下 東側	5層	1	1	1	2								2					7				
	階段下	5層																	0			1	
	墓室内ベルト	5層	1	2		1													4			1	
	墓室内ベルト	6層																	0		3	4	
	墓東側 石列下	6層												1					1			6	
井戸	現地表面から -140cmレベル	7層	5	2																8		1	
その他	周辺より	表探					1														1		
合計			9	11	3	5	1	1	24	1	1	1	144	11	1	3	2	5	1	1	225	21	42

#### (1) 墓

本遺構出土の遺物総数は216点であった。層序別の出土数は、1層が189点と、全体の88%を占め、殆どが近・現代遺物であった。1層の内訳は、沖縄産無釉陶器（壺・器種不明）、陶質土器（鍋・器種不明）、本土産磁器（碗・皿）が1点ずつの出土である。他に赤瓦13点、レンガ3点、ガラス類147点、その他は金属類、石類など20点であった（第6表）。最多出土のガラス類は、多くが飲料用瓶の破片であった。唯一ドリンク剤と見られる完形の瓶が1点出土している。他に、内容物不明で、肩から口縁部残存の瓶が1点出土している。色調は無色、口縁径2.0cm、両脇に合わせ目が見られ、口にねじ山は無い、墓室西側1層の出土。

また、外底面に陽刻の文字が見られるガラス瓶の底部が1点出土している（第7図4）。

底面には「REFLLING FORBIDDEN DESIGN PAT NO 158213 18 N 70 MOGEN DAVID WINE CORP.」の文字があり、内容としては、「入替え禁止」「意匠番号 158213」「モーガンデビット ワイン会社」等と読み取れる。ほか「70」と見られる数字があり、これは意匠特許を取った年代（1970年）と考えられる。内容物は底部の形状などからワインであるか判然としない。

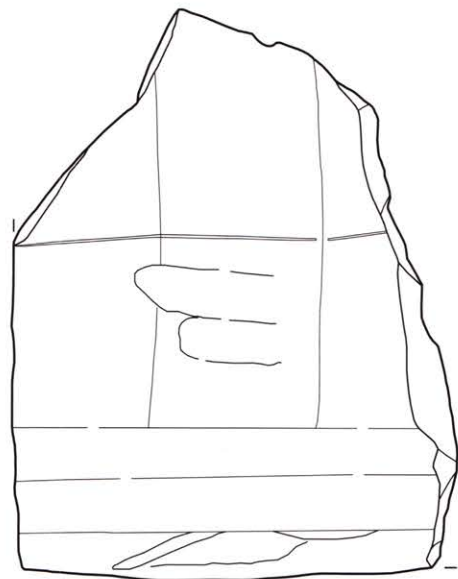
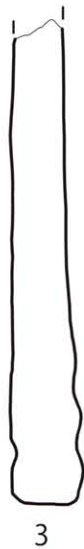
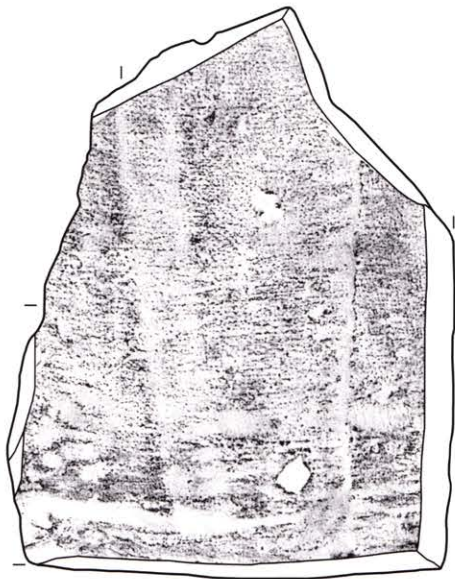
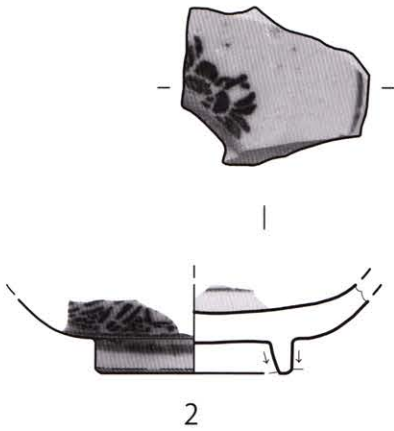
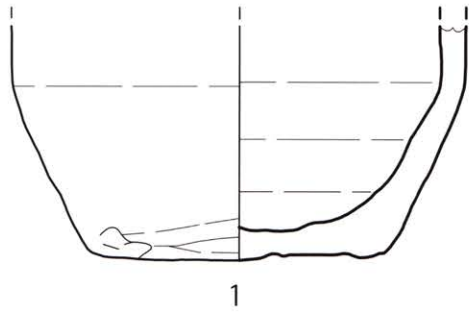
本遺構出土のガラス片に、表面が虹色をおび、その粉状物質が剥がれ、付着するものが見られた。これは「この現象は「虹彩（銀化）」といわれ、風化によって生じたものとされている」（註11）と同様の現象と考えられる。

瓦・レンガ類の中で、耐火レンガとみられる、完形の遺物が得られている。大きさは、横22.7cm、縦11.2cm、厚さ6.3cmで「WARCO XX D」の陰刻が確認できる。

第5表 遺物(墓)観察一覧

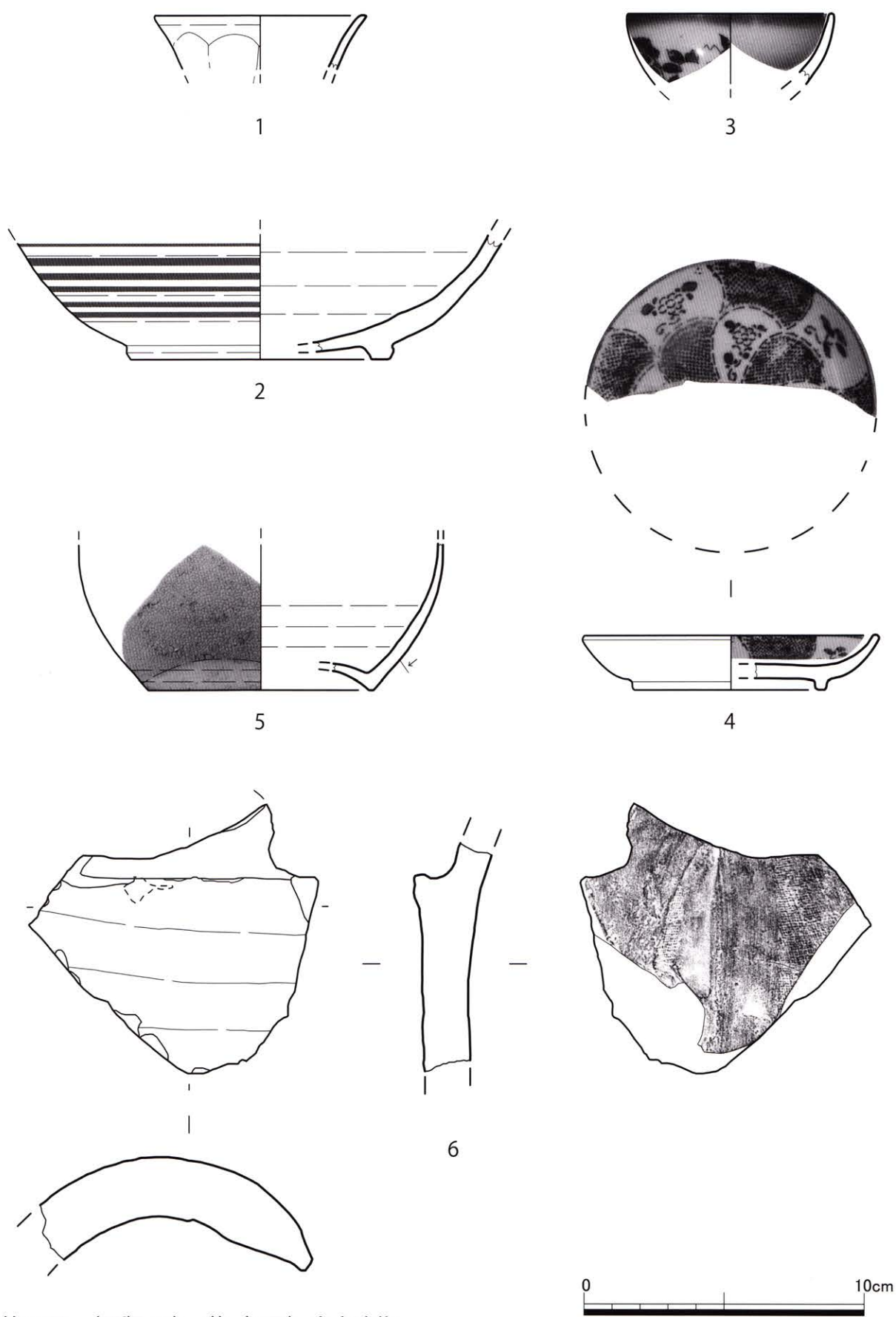
単位:cm

挿図 図版	番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地点
第7図 (図版14)	1	無釉陶器	壺	底部	- - 7.8	壺の底部である。 底部から開き気味に立上り、4.5cmのところ、直に上部へ延びる。 最大胴径11.9cmを測る。下部は、ヘラナデ・削りによる調整痕が見られ、 外底面は未調整。内面はロクロ痕が残る。 色調:(外)暗褐色、(内)黒褐色、(素地)茶褐色	墓室東側 1層
	2	本土産磁器	碗	底部	- - 5.2	磁器碗の底部である。 内外面を施釉し、畳付けの釉を削り取る。内外面はコハルトによる型紙 刷り文様が施される。内底面に約3mmの目痕が見られる。	墓室東側 1層
	3	赤瓦	平瓦	角破片	厚さ 1.9	平瓦の下部角が残る破片資料である。 外面は、全面に布目と右側縦に布袋の縫い目が見られる。下部端は 5mmの紐痕が残る。 内面は、桶巻痕と思われる縦に4.5cm幅の凸線が見られる。下部には 横位に凹線が2本見られる。また、左端部に、塗料の様な灰色が僅か に見られる。	墓室東側 1層
	4	ガラス製品	瓶	底部	- - 9.2	ガラス製瓶の底部資料で、無色透明である。 底面は中心3mmの上げ底になる。底部際には、ナリングが施される。 外底面には「REFILLING FORBIDDEN」「DESIGN PAT」「NO 15823」 「MOGEN DAVID」「WINE CORP」と陽刻される。	墓室内 1層
第8図 (図版15)	1	施釉陶器	碗	底部	- - 7.0	灰釉碗の底部である。 高台脇をヘラ削りにより界線を作る。畳付けは平坦で接地する。 灰釉を内外面の腰部まで施釉し、高台は露胎となる。 内底に同釉の飛び散りが見られる。畳付けに目砂付着。 釉色:内外面とも灰色 素地:淡灰色	墓室西側 3~4層
	2	施釉陶器	碗	底部	- - 7.1	灰釉碗の底部である。 高台脇をヘラ削りにより界線を作る。畳付けは平坦で接地する。 灰釉を内外面の腰部まで施釉し、高台は露胎となる。 畳付けと内底に目砂付着。 釉色:内外面とも黄灰色 素地:淡橙色	墓室西側 3~4層
	3	蔵骨器	蓋	庇	庇径 32.0	厨子甕(蓋)の底部と見られる。 外面端部まで、マンガ釉を施し、内面は露胎となる。 外面に、2~8mmの石灰質粒の露出が見られる。庇端部、内面に粘 土の溶着痕が残る。 釉色:外面、黒褐色 素地:赤褐色、白色・黒色粒子が散見される。	墓室西側 3~4層
第9図 (図版16)	1	施釉陶器	小碗	口縁部	7.6 - -	外反する小碗の口縁部である。 胴部を面取りで囲繞する。面取りは、残存部で復元すると10面が想定 される。 釉色:内外面とも黄白色 素地:淡灰色	階段下_東側 5層
	2	陶質土器	炉	底部	- - 9.3	炉の底部である。 高台際は、ヘラ削りによる調整が施され、手触りは滑らか。 胴部外面は、白土による横線文を施す。内面は、ロクロ成形後ナデ調整 が施される。ほんのり黒ずむ煤痕かは不明。 色調:外面、内面、素地ともに、橙褐色。	階段下_東側 5層
	3	本土産磁器	小碗	口縁部	7.4 - -	磁器小碗の口縁部である。 内外面施釉し、外面に銅版転写による文様が施される。文様は茶色 と深緑色で花と葉が描かれる。茶色の花文は花卉の形から桜と見ら れる。 口唇は内外ともコハルトによる圏線が巡る。	階段下_東側 5層
	4	本土産磁器	皿	口~底	10.6 1.9 6.8	磁器の全形が窺える皿である。 内面に花卉で区画された型紙刷りによる文様が施される。 内外面ともに、施釉されるが、畳付けは露胎となる。 畳付けに目砂が見られる。	階段下_東側 5層
	5	本土産磁器	袋物	底部	- - 8.2	磁器で壺の底部と見られる。 底部は中心に向かい上げ底になる。底部際に、ヘラ削り調整が見られ る。 内面は透明釉を残存部全面に施釉。外面は、胴下部まで、鮫肌釉を 施し、下部から外底面は露胎となる。	墓室内_ベルト 5層
	6	赤瓦	丸瓦	角破片	厚さ 1.7	丸瓦の玉縁が僅かに残る破片資料である。 外面の縁近くに、横位のナデ調整が見られる。また、縁にセメントの付着 が見られる。 内面は、布目が見られるが、ナデ調整で一部が消される。角は面取り される。	階段下_西側 5層



第7図 (図版14) 墓(1層)出土遺物





第9図 (図版16) 墓(5層)出土遺物

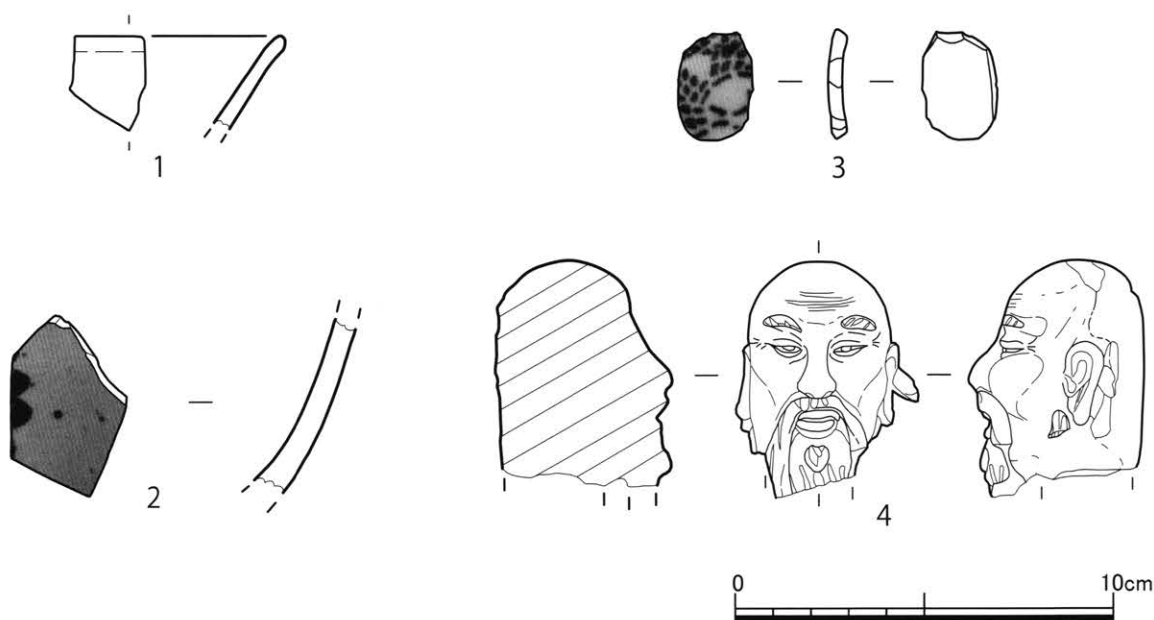
(2) 井戸

本遺構から得られた人工遺物は総数8点であった。内訳は、沖縄産施釉陶器の灰釉碗1点、白化粧碗1点、壺又は、袋物と見られる胴部片3点、沖縄産無釉陶器の器種不明2点、本土産磁器碗（型紙刷り）の胴部を素材とした円盤状製品1点であった。他に巻貝が1点出土している。本遺構出土の遺物は全て、井戸の現地表面から-140cmの7層から得られている。第10図に本遺構出土の遺物を図示し、第7表に観察を記す。

その他、遺構出土以外の表採遺物を報告する。(第10図、図版17の4)本土産陶器と見られる、人形の頭部の資料である。顔面はナデ調整を施し、先端の細い工具で、目・しわを描いている。目は黒色で着色し、瞳を表現している。眉と髭には白土で着色し透明釉を施す。顔面の様子から、仙人翁を想起させる。色調は表面灰色で、裏面は黄灰色で露胎となる。裏面全体には剥がれた痕が見られ、何か他の製品の装飾の一部と考えられる。頸部径は約2.3cm、最大厚は4.6cm、重量109gを測る。

第7表 遺物（井戸）観察一覧

挿図 図版	番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地点
第10 図 ( 図 版 17 )	1	施釉陶器	碗	口縁部	- - -	灰釉碗の口縁部である。 直口で、先端は丸味を帯びる。口唇直下に浅く凹線が廻る。 釉色:内外面とも緑灰色 素地:淡灰色	井戸 7層
	2	施釉陶器	碗	胴部	- - -	白化粧碗の胴部である。 外面に、呉須による花文が施される。 残存部は内外ともに白化粧の上から透明釉を施す。 素地は淡灰色を呈す。	井戸 7層
	3	本土産磁器	円盤状製品	胴部	- - -	本土産磁器(型紙刷り)碗の胴部を使用した資料である。 平面形状は、楕円形。 縦2.8cm、横2.0cm、厚み0.4cm、重さ3.39g	井戸 7層



第10図 (図版17) 井戸・その他・出土遺物

(3) 自然遺物

自然遺物は貝類遺体と動物遺体が得られた。いずれも少量であった。

A 貝類遺体

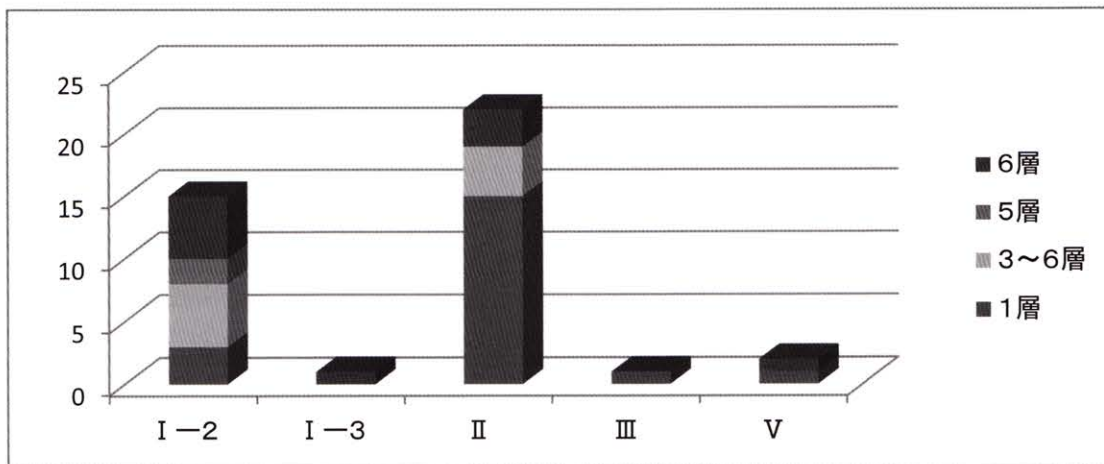
本遺跡出土の貝類遺体は、全体的に僅少であった。出土状況を貝種別に第9・10表にまとめた。内訳は巻貝7科7種類10点、二枚貝7科13種類30点、陸産2科2種類2点、総数42点である。その内41点が墓室から出土し、他1点は、井戸から得られている。

生息場所別に出土状況を見ると、Ⅱ内湾—転石域で二枚貝のみ22点・53.7%と一番多かった。次にⅠ—2外洋—サンゴ礁域／イノー内において巻貝9点、二枚貝7点・36.6%、この2地点で90%を占める。その他はⅠ—3外洋—サンゴ礁域／干瀬で巻貝1点2.4%、Ⅲ河口干潟—マングローブ域で二枚貝1点・2.4%、また陸産は2点・4.9%で少量であった。生息場所別出土を第8表と第11図に示した。

第8表 生息場所別出土一覧

墓室 1層	Ⅰ—2		Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ
	トマキホラ 1		カワラガイ 5	アラスシケマンガイ 1	アフリカマイマイ 1
	マガキガイ 1		リュウキュウサルガイ 3		
	サツマヒナ 1		リュウキュウハカガイ 1		
			ユウカゲハマグリ 2		
			タマキ 1		
			ヒメニコウガイ 1		
			ヌノメガイ 1		
			マスオガイ 1		
墓室 3～6層	Ⅰ—2		Ⅱ		
	フネガイ 1		ユウカゲハマグリ 1		
	ヒメツキガイ 4		ケショウオミナエシ 1		
			リュウキュウハカガイ 1		
			リュウキュウシラトリ 1		
墓室 5層	Ⅰ—2				
	マガキガイ 1				
	オニツガイ 1				
墓室 6層	Ⅰ—2	Ⅰ—3	Ⅱ		Ⅴ
	キヌカツキイモガイ 1	チョウセンサザエ 1	カワラガイ 1		オキナワタタニシ 1
	ニシキウスガイ 1		リュウキュウハカガイ 1		
	マガキガイ 1		リュウキュウシラトリ 1		
	フネガイ 1				
	ヒメツキガイ 1				
井戸-140cm一括7層	Ⅰ—2				
	マガキガイ 1				

\* 貝種の数字は出土個数



第11図 墓室出土・貝類遺体の生息場所別出土状況

第9表 巻貝出土一覧

番号	貝種名	地区層	生息地	墓西側1層			墓室内ベルト5層			墓階段下5層			墓室内ベルト6層			墓東側石列下6層			井戸-140cm一括7層			合計				
				完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片		
1	リュウテン科	チョウセンサザエ	I-3-a												1								1			
2	ニシキウズガイ科	ニシキウズガイ	I-2-a									1											1			
3	オニツルガイ科	オニツルガイ	I-2-C						1														1			
4	スィジョウガイ科	マガキガイ	I-2-C	1			1						1								1		3			
5	トマキホウ科	トマキホウ	I-2-a			1									1								1			
6	マクラガイ科	サツマビナ?	I-2-C			1																	1			
7	イモガイ科	キヌカツギイモガイ?	I-2-a												1								1			
8	アヲカマイマイ科	アヲカマイマイ	V-8			1																	1			
9	ヤマタニシ科	オキナワヤマトニシ	V-8												1								1			
合計				1	1	2	0	1	0	0	1	0	1	1	1	1	0	1	0	1	0	1	0	3	5	4
				4			1			1			3			2			1			12				

第10表 二枚貝出土一覧

番号	貝種名	地区層	生息地	墓東側1層			墓西側1層			墓東側3~6層			墓室内ベルト6層			墓東側石列下6層			合計													
				完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片											
				右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左									
1	フネガイ科	フネガイ	I-2-a								1					1						1	1									
2	ツキガイ科	ヒメツキガイ	I-2-C							2	2				1							3	2									
3	ザルガイ科	カワカガイ	II-2-C	1	2		1	1						1								3	2									
4	ザルガイ科	リュウキュウザルガイ	II-2-C	2	1					1												2	1									
5	ハカガイ科	リュウキュウハカガイ	II-2-C	1						1					1							1	2									
6	ハカガイ科	タマキ	II-1-C				1															1	1									
7	ニッコウガイ科	ヒメニッコウガイ	II-2-C				1															1	1									
8	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	II-1-C							1					1							1	1									
9	イソシジミ科	マスオガイ	II-1-C				1															1	1									
10	マルスダレガイ科	ユウカゲハマグリ	II-2-C	1	1					1												2	1									
11	マルスダレガイ科	アラスシケマンガイ	III-1-C	1	1																	1	1									
12	マルスダレガイ科	ヌメガイ	II-2-C	1																		1	1									
13	マルスダレガイ科	ケショウオミナエシ	II-2-C							1												1	1									
合計				5	6	0	0	0	2	1	2	0	0	2	5	0	2	0	0	0	0	1	1	2	1	0	0	10	14	3	2	1
				11			5			9			1			4						30										

番号は図版の番号と対応



## B 動物遺体

本遺跡出土の動物遺体は、爬虫類・ヘビ、鳥類・ニワトリ、トリ不明、哺乳類・ネズミ、イヌ、ブタ、ウシカウマ 6 種類が得られた。どの骨類も極僅かな量であった。動物遺体は全て墓室から出土したものである（第 11 表）。

ヘビは椎骨が 1 点、4～6 層出土。

トリはニワトリの上腕骨がある。ニワトリのすべてが 1 層の資料である。トリは、3～6 層と 6 層からの 1 点ずつ得られた。

哺乳類はネズミ・イヌ・ブタ・ウシカウマなどが見られたが、どれも僅少であった。

ネズミは 1 層で下顎骨、6 層で寛骨がある。イヌは頭骨、破片で四肢骨と見られる資料があった。1 層と 4～6 層の出土であることから同一の個体かはわからない。ブタも少量で、1 層から出土している。切断痕が見られた資料である。ウシカウマは四肢骨だと見られた。

第 11 表 動物遺体出土一覧

遺構	層序	種類	部位	左右	部位a	備考	個数	図版番号
墓室西側	4～6層	ヘビ	椎骨				1	図版19上1
墓室東側	1層	ニワトリ	上腕骨	左			1	図版19上2
	1層	ニワトリ					1	図版19上4
墓室東側	1層	ニワトリ	脛骨	右			1	図版19上3
	1層	トリ	四肢骨	不明			2	図版19上5・9
	1層	トリ	四肢骨	不明			2	図版19上6・10
墓室内	1層	トリ				ケガの痕あり		
	1層	トリ	四肢骨	不明		破片	2	図版19上8
墓室東側	3～6層	トリ					1	図版19上7
墓室内ベルト	6層	トリ				破片	1	
墓室東側	1層	ネズミ	下顎骨	右			1	図版19下1
墓室内ベルト	6層	ネズミ	寛骨	左			1	図版19下2
墓室西側	4～6層	イヌ	頭蓋骨			破片	1	図版19下3
	4～6層	イヌ				破片	1	図版19下4
墓室内ベルト	6層	イヌ	頭蓋骨			破片	1	
墓室東側	1層	ブタ	肋骨	左		切断痕あり	1	図版19下5
	1層	ブタ		左		骨端のみ	1	図版19下6
墓室東側	1層	ウシカウマ	四肢骨	不明		切断痕あり	1	図版19下7
合計							21	

## C 人骨

本遺構は自然洞穴を利用した墓である。その調査範囲は小さく、よって出土量も少量であった（第 12 表）。

人骨は 91 点出土した。頭蓋骨が得られているが、1 層 1 点、3～6 層で 6 点、4～6 層 1 点、また 6 層で 4 点と層序をまたいで出土している。そのことから層序は安定したものではないと考えられた。

3～6 層で、上顎骨に永久歯を装着した状態で出土した。歯は 5 点得られているが、全てが永久歯である。そのうち 1 点は、摩耗が激しくエナメル質の部分が半分になっている。また中節骨で大型と小型のサイズが見られることから、幼児や大人が含まれているものと考えられた。

第 12 表 人骨出土一覽

遺構	層序	部位	左右	部位a	備考	個数	図版番号
墓室東側	1層	頭蓋骨				1	
		中手骨	右			1	図版21-22
		不明				1	
						5	
墓室東側	3~6層	頭蓋骨	右		破片	1	図版20-1
		頭蓋骨			破片	5	図版20-2・3
		上顎骨			齒付	1	図版20-4
		脛骨	右		端部	1	図版20-10
		肋骨			小型	1	
		齒(大臼齒)			完	1	図版21-15
		齒(大臼齒)			完	1	図版21-14
		齒(小臼齒)			完	1	図版21-13
		齒(小臼齒)			完	1	図版21-12
		齒			完	1	図版21-11
					破損	1	
			破片	5			
墓室西側	4層	肋骨				2	
		胸椎				1	
		椎骨				2	図版20-7・8
		椎骨			突起部	1	
						1	
						1	
						5	
墓室西側	4~6層	耳				1	図版20-5
		頭蓋片				1	図版20-6
		肩甲骨	右			1	図版20-9
		椎骨			突起部	1	
		尺骨			破片	1	
		肋骨			破損・小型	1	
		手根骨			完	1	図版21-16
		手根骨			完	1	図版21-17
		手根骨			完	1	図版21-18
		中手骨			完1、破片2	3	図版21-19・20・21
		中足骨			完	1	図版21-23
		基節骨			完	2	図版21-24・25
		中節骨			完	1	図版21-27
		中節骨			完	1	図版21-29
					破片	1	
			破片	1			
			破片	5			
墓室内ヘルト	6層	頭蓋骨			破片	1	
		頭蓋骨			破片	1	
		胸椎				1	
		肋骨			幼児(年代測定)	1	
		大腿骨			乳児(年代測定)	1	
		手根骨			完	2	
		中手骨			破片	1	
		基節骨			完	1	図版21-26
		中節骨			完	2	図版21-28
		中節骨			破損	1	
		末節骨			完	1	図版21-30
					端部	1	
					破片	1	
					破片	1	
			破片	1			
			破片	1			
墓東側_石列下	6層	頭蓋骨			破片	2	
		上顎・切齒			成人(年代測定)	1	
		耳	右		破片	1	
		基節骨			破損・小型	1	
		不明			破片	2	
合計						91	

## 第4節 自然科学分析

### (1) 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也

#### 1. はじめに

遺跡出土人骨について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

試料は、試料 No. 18-1 のヒトの乳児大腿骨（PLD-30541）、試料 No. 18-2 のヒトの幼児肋骨（PLD-30542）、試料 No. 20 のヒトの成人上顎切歯（PLD-30543）の3点である。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30541	試料No. 18-1	種類：骨（ヒト） 部位：乳児大腿骨 状態：dry	超音波洗浄 コラーゲン抽出
PLD-30542	試料No. 18-2	種類：骨（ヒト） 部位：幼児肋骨 状態：dry	超音波洗浄 コラーゲン抽出
PLD-30543	試料No. 20	種類：歯（ヒト） 部位：成人上顎切歯 状態：dry	超音波洗浄 コラーゲン抽出

#### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代（yrBP）の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された  $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、および半減期の違い（ $^{14}\text{C}$  の半減期  $5730 \pm 40$  年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年校正にはOxCal4.2(校正曲線データ: IntCal13、海洋性試料についてはMarine13)を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$  暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代範囲		$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲	$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-30541 試料No. 18-1	-11.22 $\pm$ 0.16	879 $\pm$ 18	880 $\pm$ 20	1156-1208 cal AD (68.2%)	1050-1083 cal AD (15.1%) 1126-1135 cal AD (1.8%) 1151-1218 cal AD (78.4%)	Marine13: (DeltaR=35 $\pm$ 25) 1449-1496 cal AD (68.2%)	Marine13: (DeltaR=35 $\pm$ 25) 1429-1528 cal AD (95.4%)
PLD-30542 試料No. 18-2	-13.31 $\pm$ 0.21	997 $\pm$ 22	995 $\pm$ 20	996-1040 cal AD (68.2%)	990-1046 cal AD (80.9%) 1093-1121 cal AD (12.3%) 1140-1148 cal AD (2.2%)	Marine13: (DeltaR=35 $\pm$ 25) 1353-1430 cal AD (68.2%)	Marine13: (DeltaR=35 $\pm$ 25) 1325-1449 cal AD (95.4%)
PLD-30543 試料No. 20	-14.62 $\pm$ 0.15	1384 $\pm$ 18	1385 $\pm$ 20	645-660 cal AD (68.2%)	624-669 cal AD (95.4%)	Marine13: (DeltaR=35 $\pm$ 25) 1013-1095 cal AD (68.2%)	Marine13: (DeltaR=35 $\pm$ 25) 989-1155 cal AD (95.4%)

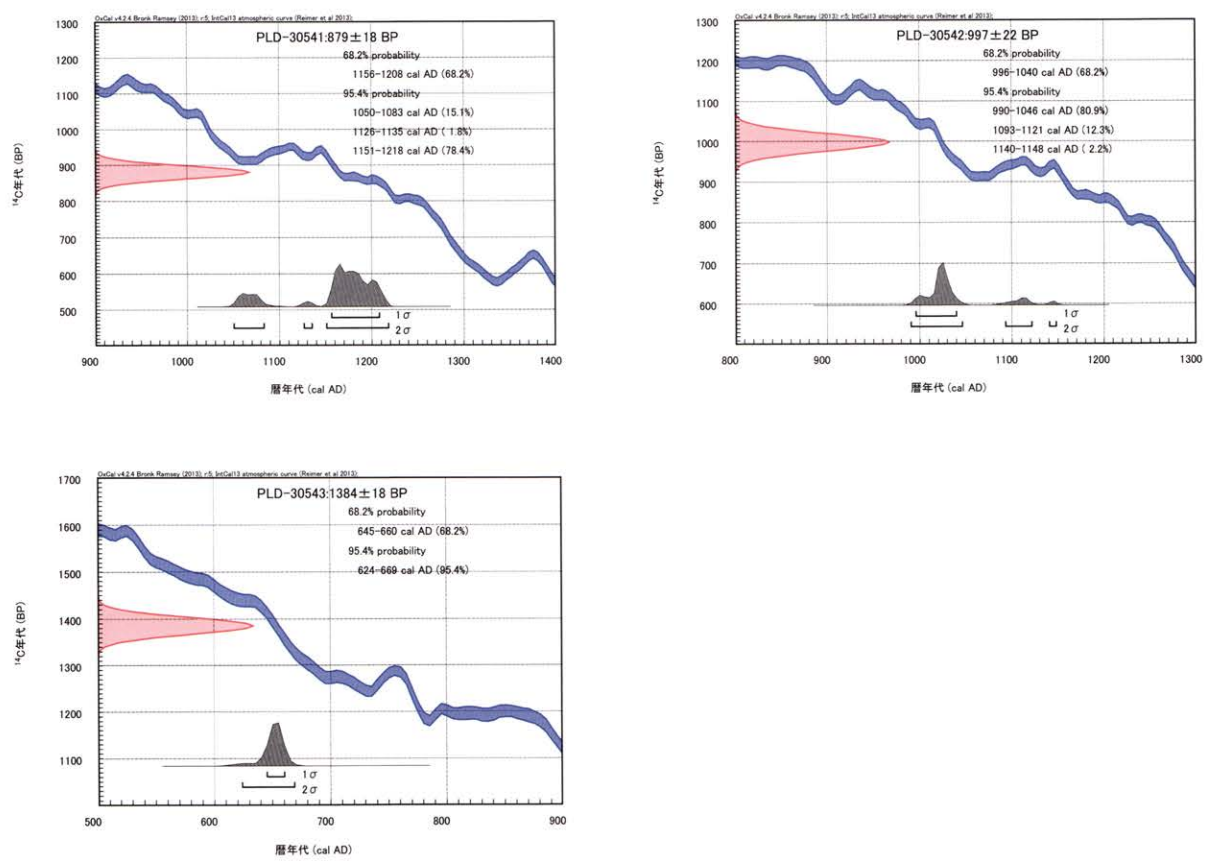


図1 暦年校正結果

4. 考察

人骨のコラーゲンのC/N比では、試料 No. 18-1 のヒトの乳児大腿骨 (PLD-30541) が 3.24、試料 No. 18-2 のヒトの幼児肋骨 (PLD-30542) が 3.25、試料 No. 20 のヒトの成人上顎切歯 (PLD-30543) が 3.25 であった。コラーゲンのC/N比は、コラーゲンの保存状態を評価する指標として用いられる。一般的に骨コラーゲンのC/N比は2.9~3.6の間に収まる(DeNiro, 1985)。そのためこれら3試料のコラーゲンでは、劣化は認められなかった。

試料No. 18-1のヒトの乳児大腿骨 (PLD-30541) は、 $^{14}\text{C}$ 年代が880  $\pm$  20  $^{14}\text{C}$  BP、IntCal13による2

$\sigma$  暦年代範囲 (確率95.4%) が1050-1083 cal AD (15.1%)、1126-1135 cal AD (1.8%)、1151-1218 cal AD (78.4%)であった。炭素・窒素安定同位体比 ( $\delta^{13}\text{C} \cdot \delta^{15}\text{N}$ ) に基づく起源物質の推定では、試料No. 18-1 (PLD-30541) は海産物を食用としていたと推定されたため、海洋リザーバー効果の影響で $^{14}\text{C}$ 年代が見かけ上古くなっていると考えられる。石垣島で行われた、Hideshima ほか (Hideshima et al, 2001) の  $\Delta R=35 \pm 25$  を用いて、海産物用の較正曲線 Marine13 で暦年較正すると、 $2\sigma$  暦年代範囲は1429-1528 cal AD (95.4%) となった。

試料 No. 18-2 のヒトの幼児肋骨 (PLD-30542) は、 $^{14}\text{C}$  年代が  $995 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、IntCal13 による  $2\sigma$  暦年代範囲が 990-1046 cal AD (80.9%)、1093-1121 cal AD (12.3%)、1140-1148 cal AD (2.2%) であった。炭素・窒素安定同位体比に基づく起源物質の推定では、試料 No. 18-2 (PLD-30542) は海産貝類付近に分布しており、海洋リザーバー効果の影響で  $^{14}\text{C}$  年代が見かけ上古くなっている可能性が高い。 $\Delta R=35 \pm 25$  を用いて、海産物用の較正曲線 Marine13 で暦年較正すると、 $2\sigma$  暦年代範囲は 1325-1449 cal AD (95.4%) であった。

試料 No. 20 のヒトの成人上顎切歯 (PLD-30543) は、 $^{14}\text{C}$  年代が  $1385 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、IntCal13 による  $2\sigma$  暦年代範囲が 624-669 cal AD (95.4%) であった。炭素・窒素安定同位体比に基づく起源物質の推定では、試料 No. 20 (PLD-30543) は陸産物と海産物の混合と推定されたため、海洋リザーバー効果の影響で  $^{14}\text{C}$  年代が見かけ上古くなっている可能性が考えられる。試料 No. 20 を海産物 100% と仮定し、 $\Delta R=35 \pm 25$  を用いて、海産物用の較正曲線 Marine13 で暦年較正すると、 $2\sigma$  暦年代範囲は 989-1155 cal AD (95.4%) である。真の暦年代は、陸産物 100% と仮定した 624-669 cal AD (95.4%) と海産物 100% と仮定した 989-1155 cal AD (95.4%) の間に収まると考えられる。

#### 参考文献

- DeNiro, M. J. (1985) Postmortem preservation and alteration of *in vivo* bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction. *Nature* 317: 806-9.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- Hideshima, S., Matsumoto, E., Abe, O. and Kitagawa, H. (2001) Northwest Pacific Marine Reservoir Correction Estimated from Annually Banded Coral from Ishigaki Island, Southern Japan. *Radiocarbon*, 43(2A), 473-476.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代編集委員会編「日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

## (2) 人骨の炭素・窒素安定同位体比分析

山形秀樹・小林克也（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

遺跡より検出された人骨を対象として、食性を推定するために、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、コラーゲンの質チェック用に炭素含有量と窒素含有量を測定して試料の C/N 比を求めた。なお、同じ試料を用いて放射性炭素年代測定を行っている（放射性炭素年代測定参照）。

### 2. 試料および方法

試料は、試料 No. 18-1 の乳児大腿骨（PLD-30541）、試料 No. 18-2 の幼児肋骨（PLD-30542）、試料 No. 20 の成人上顎切歯（PLD-30543）の計 3 点である。

測定を実施するにあたり、試料は、超音波洗浄を施して表面に付着した汚れを除去した後、試料からコラーゲンを抽出し、それを用いて測定を行った。

炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）である Flash EA1112（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。

炭素安定同位体比（ $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ ）および窒素安定同位体比（ $\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$ ）の測定には、質量分析計 DELTAplus Advantage（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比では IAEA Sucrose（ANU）、窒素安定同位体比では IAEA N1 を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA 内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムで  $\text{CO}_2$  と  $\text{N}_2$  を分離し、TCD でそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度  $1000^\circ\text{C}$ 、還元炉温度  $680^\circ\text{C}$ 、分離カラム温度  $45^\circ\text{C}$  である。分離した  $\text{CO}_2$  および  $\text{N}_2$  はそのまま He キャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいて C/N 比を算出した。

### 3. 結果

表 1 に、試料情報と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N 比を示す。

表1 結果一覧表

試料番号	試料情報	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
18-1	年代測定番号：PLD-30541 種類：人骨 部位：乳児大腿骨	-11.8	11.2	43.1	15.5	3.24
18-2	年代測定番号：PLD-30542 種類：人骨 部位：幼児肋骨	-14.0	10.7	43.7	15.7	3.25
20	年代測定番号：PLD-30543 種類：人骨（歯） 部位：成人上顎切歯	-15.4	10.8	41.8	15.0	3.25

一般的に骨のコラーゲンの C/N 比は 2.9~3.6 の間に収まる (DeNiro, 1985)。試料の C/N 比について、試料番号 18-1 が 3.24、試料番号 18-2 と試料番号 20 が 3.25 で、この範囲内に収まる。

図 1 は炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係を示したものである。乳児大腿骨(18-1)は海産魚類付近の位置に、幼児肋骨(18-2)は海産魚類・海産貝類の位置に、成人上顎切歯(20)はサケ・海産魚類・海産貝類の位置にプロットされた。

#### 4. 考察

人の成長に必要な生体組織を構成する際、食物に含まれているタンパク質が利用される。このとき、食物の分子組成は変化するが、同位体組成はほとんど変えることなく体組織の一部に残存する。このため、人の体組織の同位体組成から、主に消費した食物の情報を推定することが可能となる。

人骨について、得られた炭素・窒素同位体比の値は乳児大腿骨(18-1)が海産魚類付近、幼児肋骨(18-2)が海産魚類・海産貝類、成人上顎切歯(20)がサケ・海産魚類・海産貝類に相当する結果であった。人が食物中のタンパク質を利用して体組織を構成する際に同位体分別が起きる。人骨中のコラーゲンについては、分析値に  $\delta^{13}\text{C}$  で 4.5‰、 $\delta^{15}\text{N}$  で 3.5‰ 差し引くことにより体内での同位体分別効果を補正することができる (Ambrose, 1993)。同位体分別効果を補正した結果を図 1 に示した。補正後の値は乳児大腿骨(18-1)が海産貝類、幼児肋骨(18-2)が海産貝類付近、成人上顎切歯(20)が海産魚類・海産貝類と  $\text{C}_3$  植物・草食動物の中間付近を示したことから、乳児大腿骨(18-1)については主に海産貝類の影響(乳児の親の食性)があると考えられ、幼児肋骨(18-2)については主に海産貝類を、成人上顎切歯(20)については海産物と  $\text{C}_3$  植物を万遍なく食していたと考えられる。

#### 引用・参考文献

- DeNiro, M. J. (1985) Postmortem preservation and alteration of *in vivo* bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction. *Nature* 317: 806-9.
- 赤澤 威・南川雅男 (1989) 炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元. 田中 琢・佐原 眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」: 132-143, クバプロ.
- Ambrose, S. H. (1993) Isotopic analysis of paleodiet: methodological and interpretive considerations. In: Sandford MK, editor. *Investigations of ancient human tissue: chemical analysis in anthropology*. Langhorne: Gordon and Breach. 59-130.
- 吉田邦夫・宮崎ゆみ子 (2007) 煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究. 平成 16-18 年度科学研究補助金基礎研究 B (課題番号 16300290) 研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」, 85-95.
- 吉田邦夫・西田泰民 (2009) 考古科学が探る火炎土器. 新潟県立歴史博物館編「火焰土器の国新潟」: 87-99, 新潟日報事業社.

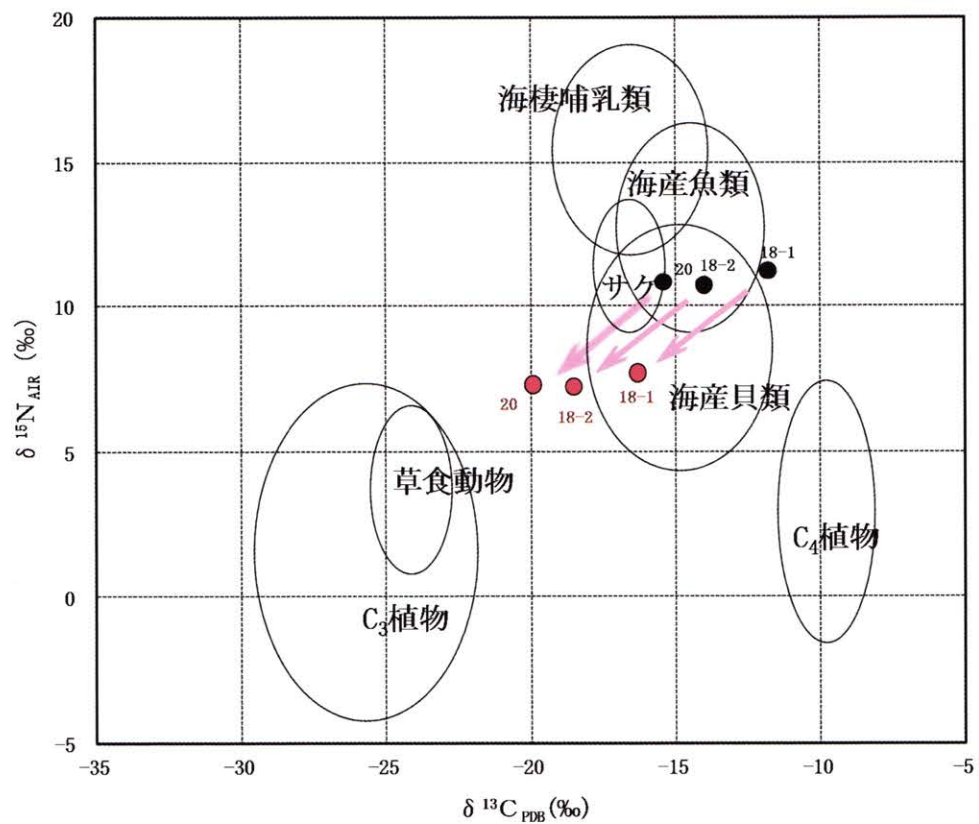


図1 炭素・窒素安定同位体比(吉田・西田(2009)に基づいて作成)



## 第Ⅳ章 総括

本調査は、平成 25 年 8 月から 9 月にかけて、「蔵森（クランモー）文化財発掘調査業務委託」として行われた。

クランモーは、北谷町字伊平 224 番地 1 に位置する小高い丘と麓の広場一帯を指す。調査当時は丘陵の一部と樹齢 400 年ともいわれるガジュマルが残っており、戦前まで在った、旧字伊礼集落の集会所としての面影を感じることができた。丘陵の北側斜面と広場には、返還後に復元された「字伊禮祖霊之墓」（現在、銘「字伊礼拝所」）と井戸が伊礼郷友会の方々により保存・管理されている。

近年、北谷町では国道 58 号の拡幅建設事業により開発が著しい。この事業に伴い、国道に隣接するクランモーについても、その形が失われることとなったため、今回の調査の運びとなった。調査に先立って、墓と井戸については、新しく建設された伊礼郷友会館の敷地内に新しく作られた拝所と井戸に移転が行われた。移転については、郷友会が取り仕切り行い、移転作業の記録は北谷町教育委員会文化係が行った。

調査においては、まず、返還後の復元工事の際、建造されたコンクリートの上屋の撤去から行われた。コンクリートの下には、往年のクランモーの姿を彷彿させる、墓と井戸の本体が残されていた。

墓の調査では、墓室内と墓庭部（コンクリート階段の下）において戦前から戦後にかけて堆積したと思われる土中より、墓として使用されていた時の痕跡である、遺物が多数出土している。特に、最下層近辺で出土した人骨については、理化学分析において新しいもので 800 年以上、古いもので 1300 年以上前のものであることが判明した。これらは当初の想定をはるかに遡るものである。また同分析により、これらの人骨は海産物や海産貝類、植物類（C3 植物）を万遍なく食していたことが判っている。これらの分析結果については、文献に、明治末期の県道改修の際、クランモー西側の鍾乳洞にある人骨を骨壺に入れ移転した、との記述があることから、当墓のものであるとは断定はできない。しかしながら、これらの結果は、伊礼集落の成立を考慮するうえで非常に重要である。

井戸の調査では、現在残されている井戸の石積みのおよそ大半が、返還後に復元された石積みであることが判明した。残存している部分については、深さ 3.0m のうち、底面からおよそ 1.0m までで、そのうち 60cm は常時滞水していることから、詳細の確認は出来なかった。しかしながら、井戸ごと断ち割りを行った際に観察した土層断面からは、11 層（地山砂層）を掘り込み井戸を建造していることが窺える。この層は常に湿り気を帯び、井戸水は排水してもすぐ水量が復活することからすると、山手から流入する地下水が相当に豊富であることがわかるほか、おそらく伊礼集落に散在していたという家々の井戸についても、この砂層までを掘り抜き、作られていたであろうことは想像に難くない。

今回の調査では、クランモーの墓および井戸について、戦前から戦後にかけての変遷を追うことが出来た。特に墓より出土した人骨については、その年代の古さから伊礼集落の成因を考える上で、重要な発見であったといえる。

### <謝辞>

本調査および報告書の刊行に至るまで多くの方々のご指導、ご協力を賜りました。皆様のご厚意に心から感謝を申し上げます。

## 《引用文献》

- 註1 中村愿 1994 『北谷町の遺跡』—詳細分布調査報告書— 第14集 北谷町教育委員会  
註2 中村愿 東門研治 松原哲志 島袋春美 細川愛 秋本真孝 2008 『伊礼原B遺跡 伊礼原E遺跡』 第27集 北谷町教育委員会  
註3 松下孝幸 他 2003 『後兼久原遺跡』—庁舎建設に係る文化財発掘調査報告— 第21集 北谷町教育委員会  
註4 北谷町旧字伊礼郷友会 2004 「旧字伊礼郷友会誌」  
註5 旧字伊礼、蔵森、獅子舞い復活推進委員会 昭和60年 「蔵森・獅子舞い復活記念誌」  
註6 横田重 昭和47年 『琉球史料叢書 二』 井上書房  
註7 名嘉順一 東恩納みさき 八田夕香 2006 『北谷町の地名』 第24集 北谷町教育委員会  
註8 北谷町史編集事務局 平成17年 「北谷町史」第一卷附録 北谷町教育委員会  
註9 渡邊欣雄 岡野宣勝 佐藤壮広 塩月亮子 宮下克也 2008 「沖縄民俗辞典」 吉川弘文館  
註10 北谷町教育委員会 平成8年 「北谷町の自然・歴史・文化」  
註11 桜井準也 「ガラス瓶の考古学」 六一書房

## <参考文献>

- ・ 北谷町旧字伊礼郷友会 2004 「旧字伊礼郷友会誌」
- ・ 旧字伊礼、蔵森、獅子舞い復活推進委員会 昭和60年 「蔵森・獅子舞い復活記念誌」
- ・ 横田重 昭和47年 『琉球史料叢書 二』 井上書房
- ・ 横田重 昭和47年 「琉球國舊記」 卷一 神殿 『琉球史料叢書 三』
- ・ 北谷町史編集事務局 平成17年 「北谷町史」第一卷附録 北谷町教育委員会
- ・ 中村愿 1994 『北谷町の遺跡』—詳細分布調査報告書— 第14集 北谷町教育委員会
- ・ 中村愿 東門研治 島袋春美 2005 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』 第23集 北谷町教育委員会
- ・ 松下孝幸 他 2003 『後兼久原遺跡』—庁舎建設に係る文化財発掘調査報告— 第21集 北谷町教育委員会
- ・ 名嘉順一 東恩納みさき 八田夕香 2006 『北谷町の地名』 第24集 北谷町教育委員会
- ・ 中村愿 東門研治 松原哲志 島袋春美 細川愛 秋本真孝 2008 『伊礼原B遺跡 伊礼原E遺跡』 第27集 北谷町教育委員会
- ・ 中村愿 東門研治 他 2008 『伊礼原D遺跡』 第28集 北谷町教育委員会
- ・ 東門研治 島袋春美 他 2008 『平安山原B遺跡』 第29集 北谷町教育委員会
- ・ 松原哲志 山城安生 島袋春美 他 2011 『平安山原地区試掘調査』 第33集 北谷町教育委員会
- ・ 山城安生 他 2013 『伊礼原D遺跡』 第35集 北谷町教育委員会
- ・ 山城安生 東門研治 他 2015 『平安山原B遺跡』 第37集 北谷町教育委員会
- ・ 北谷町史編集事務局 昭和60年 第1回町史セミナー シンポジウム「北谷町の歴史」—文献をもとにその変遷を探る—
- ・ 北谷町教育委員会 平成8年 「北谷町の自然・歴史・文化」
- ・ 真栄城兼良 1961 「北谷村誌」 崎浜盛永
- ・ 渡邊欣雄 岡野宣勝 佐藤壮広 塩月亮子 宮下克也 2008 「沖縄民俗辞典」 吉川弘文館
- ・ 国土庁と地局国土調査課 1983 「土地分類基本調査—沖縄本島中南部地域— 国土調査:沖縄県
- ・ 史跡伊礼原遺跡保存管理計画策定委員 2012 『史跡「伊礼原遺跡」保存管理計画書』 北谷町教育委員会
- ・ 島弘 仲宗根啓 他 2013 『湧田村跡』 第96集 那覇市教育委員会文化財課
- ・ 家田淳一 他 1998 「沖縄のやきもの」—南海からの香り— 佐賀県立九州陶磁文化館
- ・ 桜井準也 「ガラス瓶の考古学」 六一書房
- ・ 大城一成 名和純 他 2010 『真栄里兼久原遺跡』 第24集 糸満市教育委員会総務部文化課
- ・ 行田義三 2003 「貝の図鑑 採集と標本の作り方」 南方新社

版 圖



図版7 遺跡全景 上：全景(58号を望む)  
下：調査区(パノラマ)



図版 8 遺構（墓）上：着手前現況  
下：墓口検出状況



図版9 遺構（墓）上：掘削状況  
下：遺物出土状況



図版 10 遺構（墓） 上：完掘状況  
下：墓室内近景



図版 11 遺構（井戸） 上：着手前状況  
下：平面検出状況

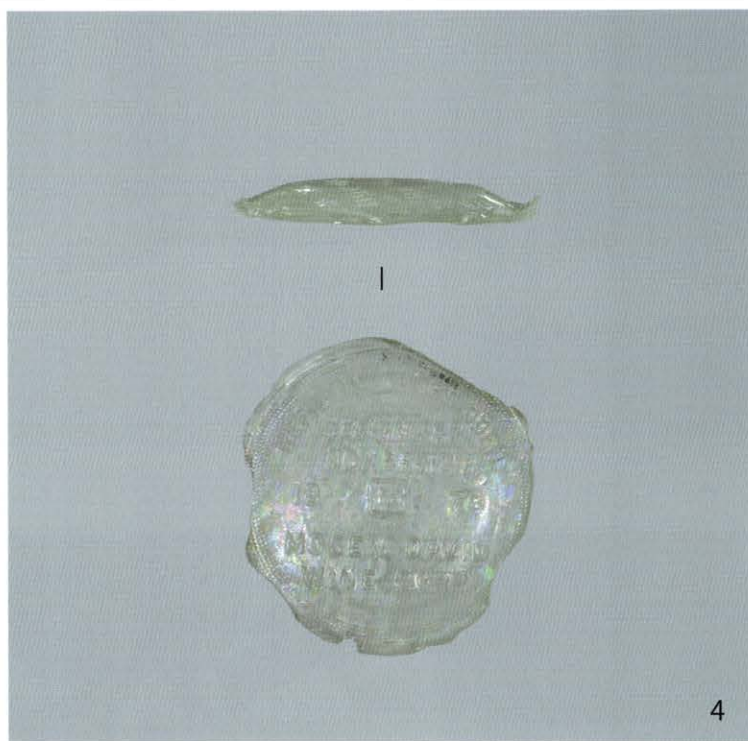




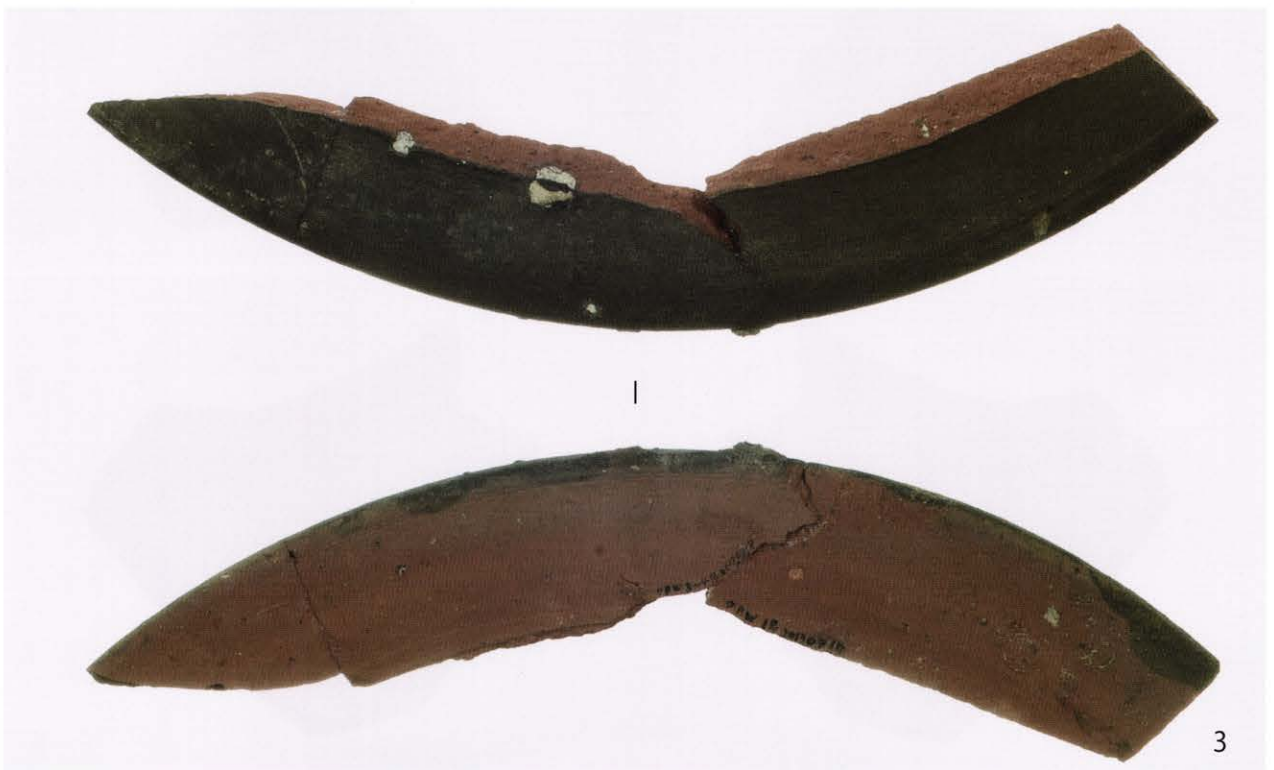
図版 12 遺構（井戸） 上：半裁状況  
下：半裁完掘状況



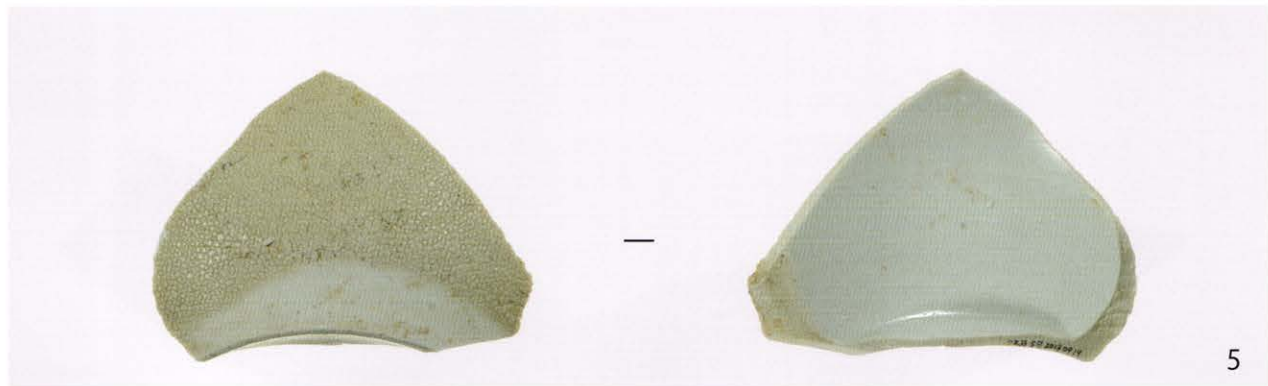
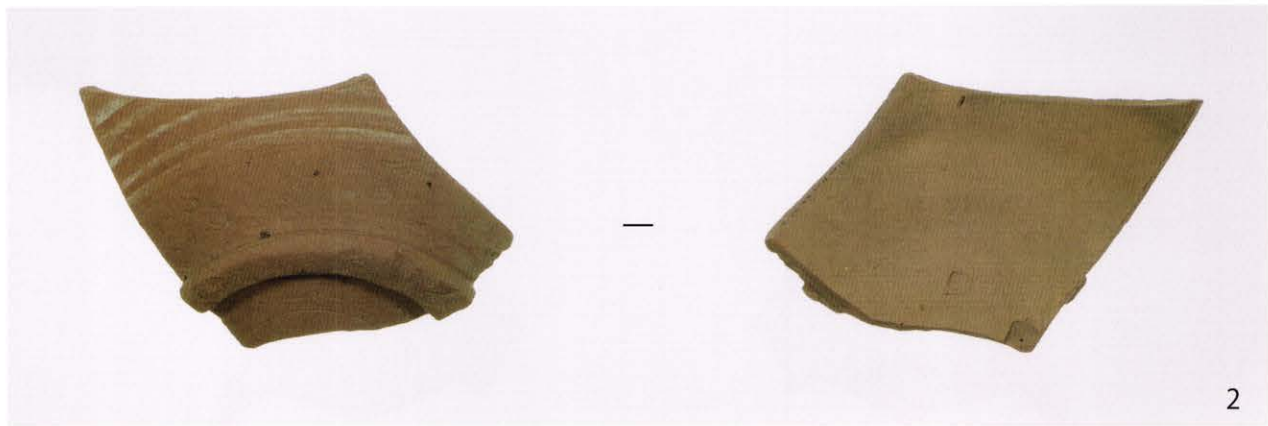
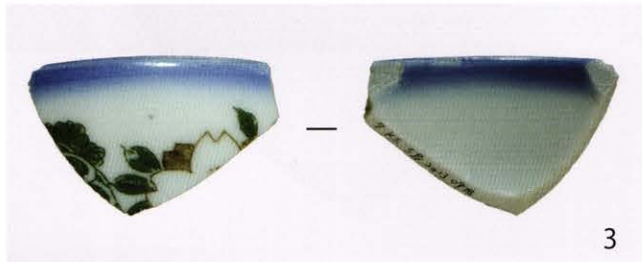
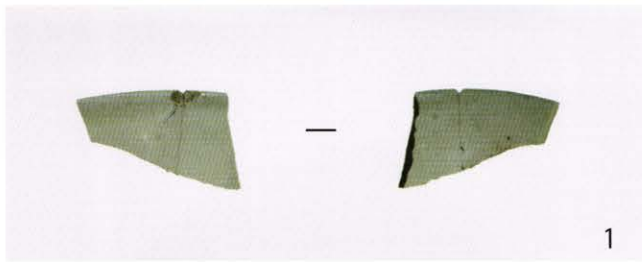
図版 13 現況 上：拝所の現在の状況  
下：字伊礼郷友会員



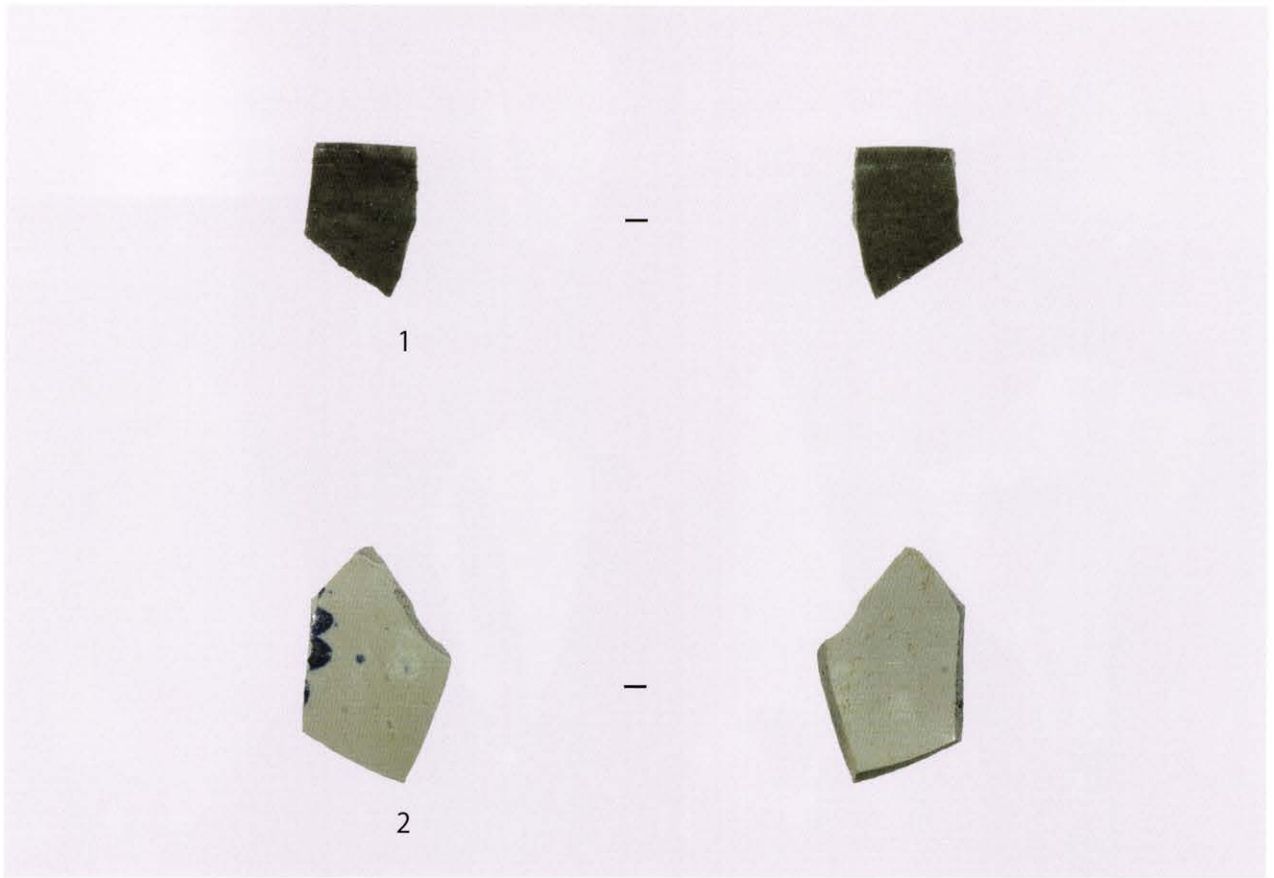
图版 14 (第 7 图) 墓 (1 层) 出土遗物



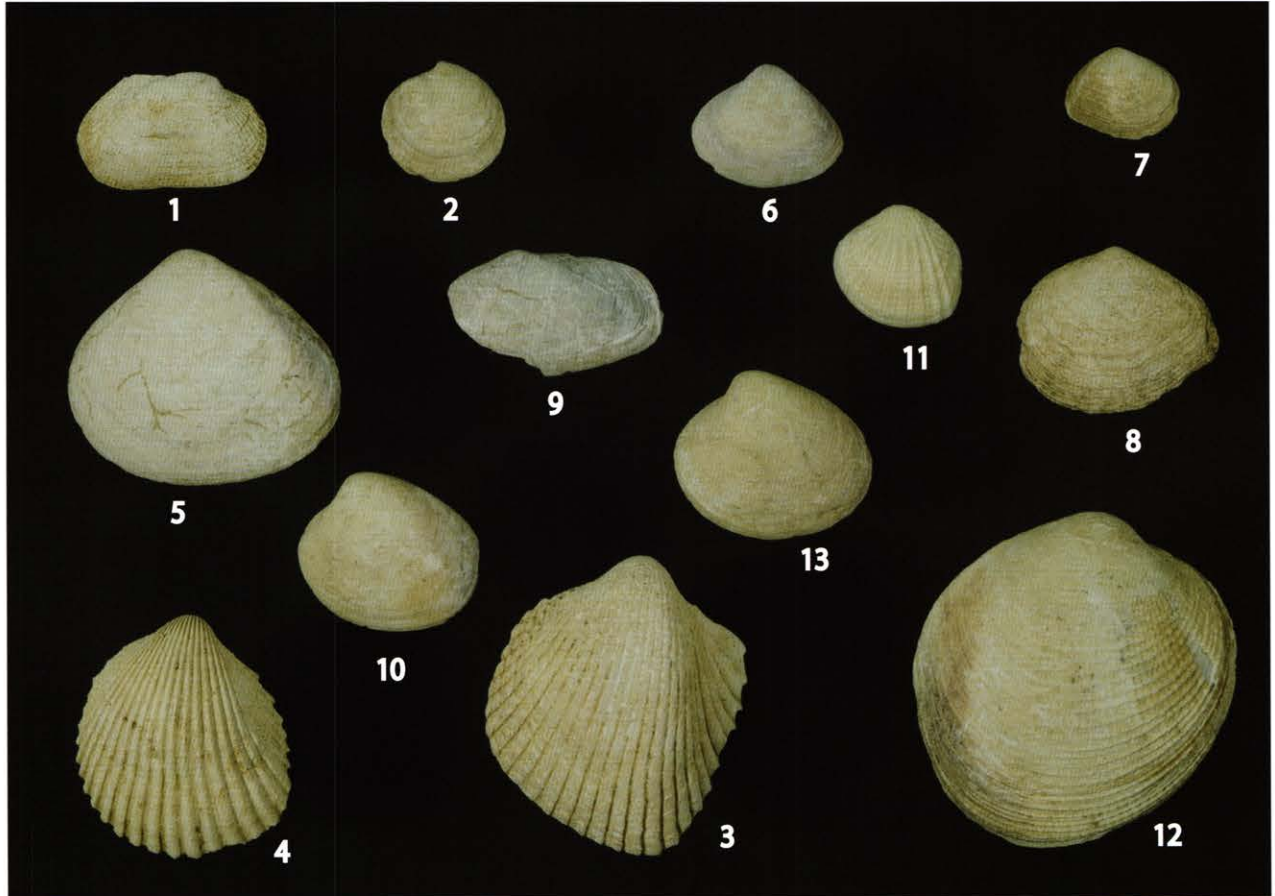
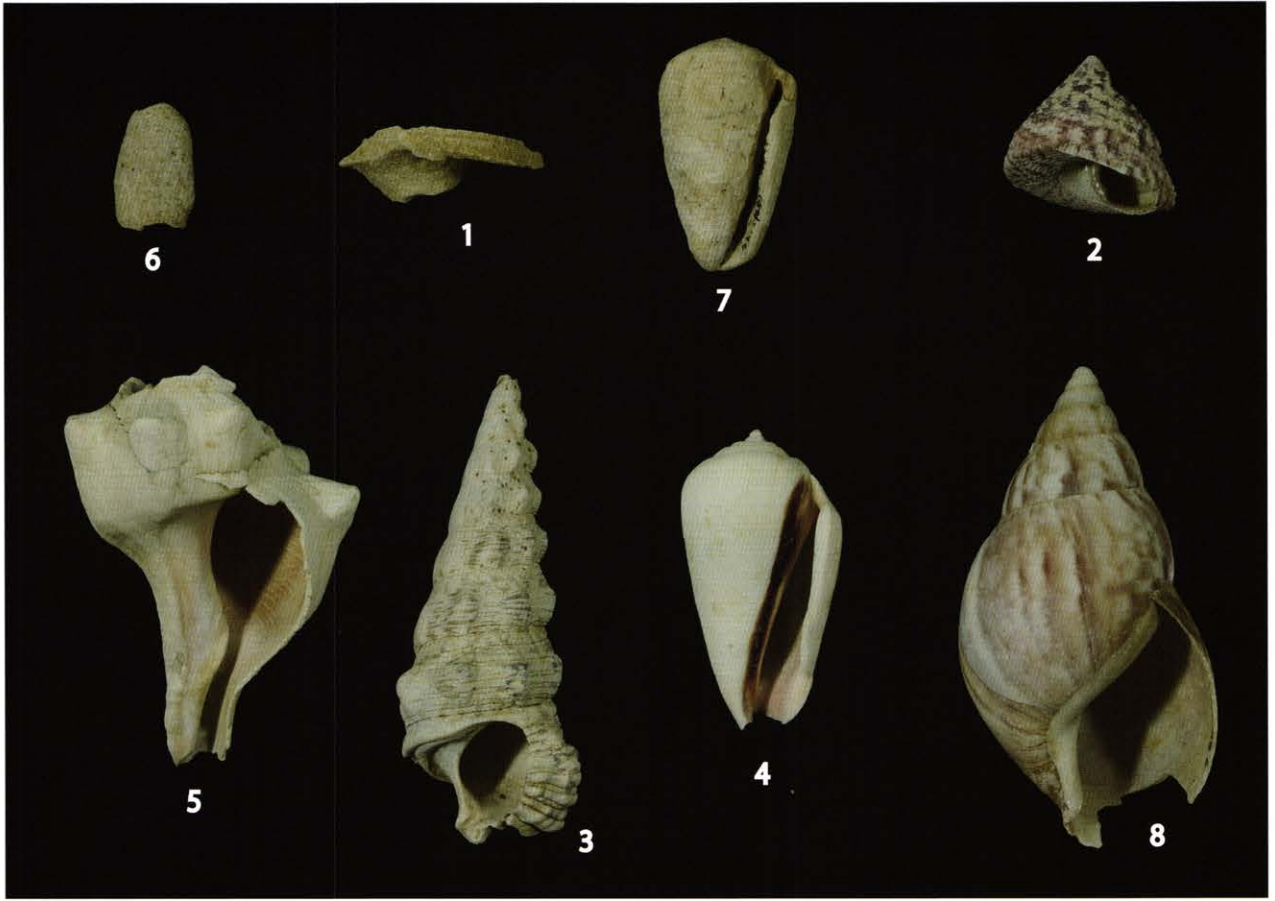
図版 15 (第 8 図) 墓 (3~4 層) 出土遺物



図版 16 (第 9 図) 墓 (5 層) 出土遺物

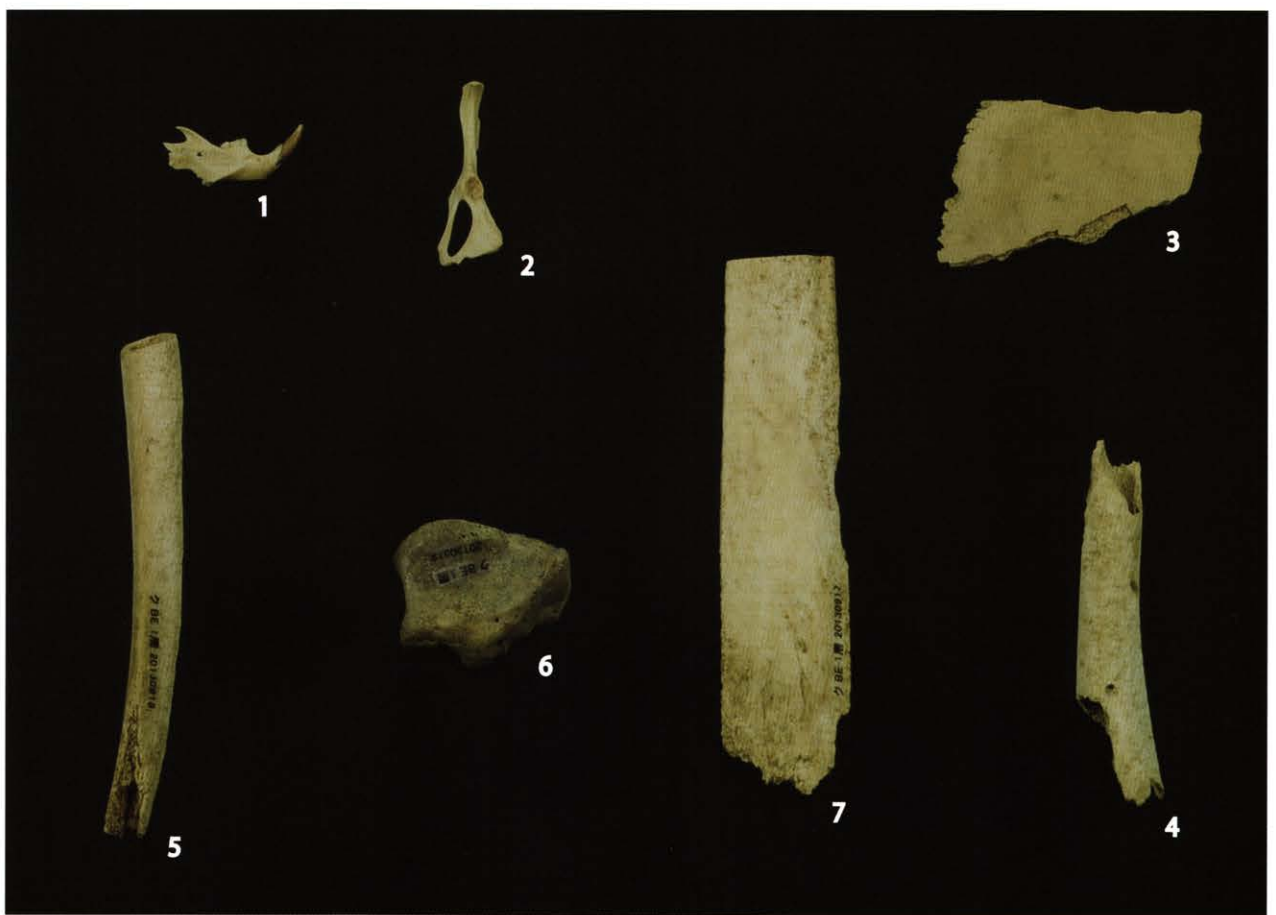
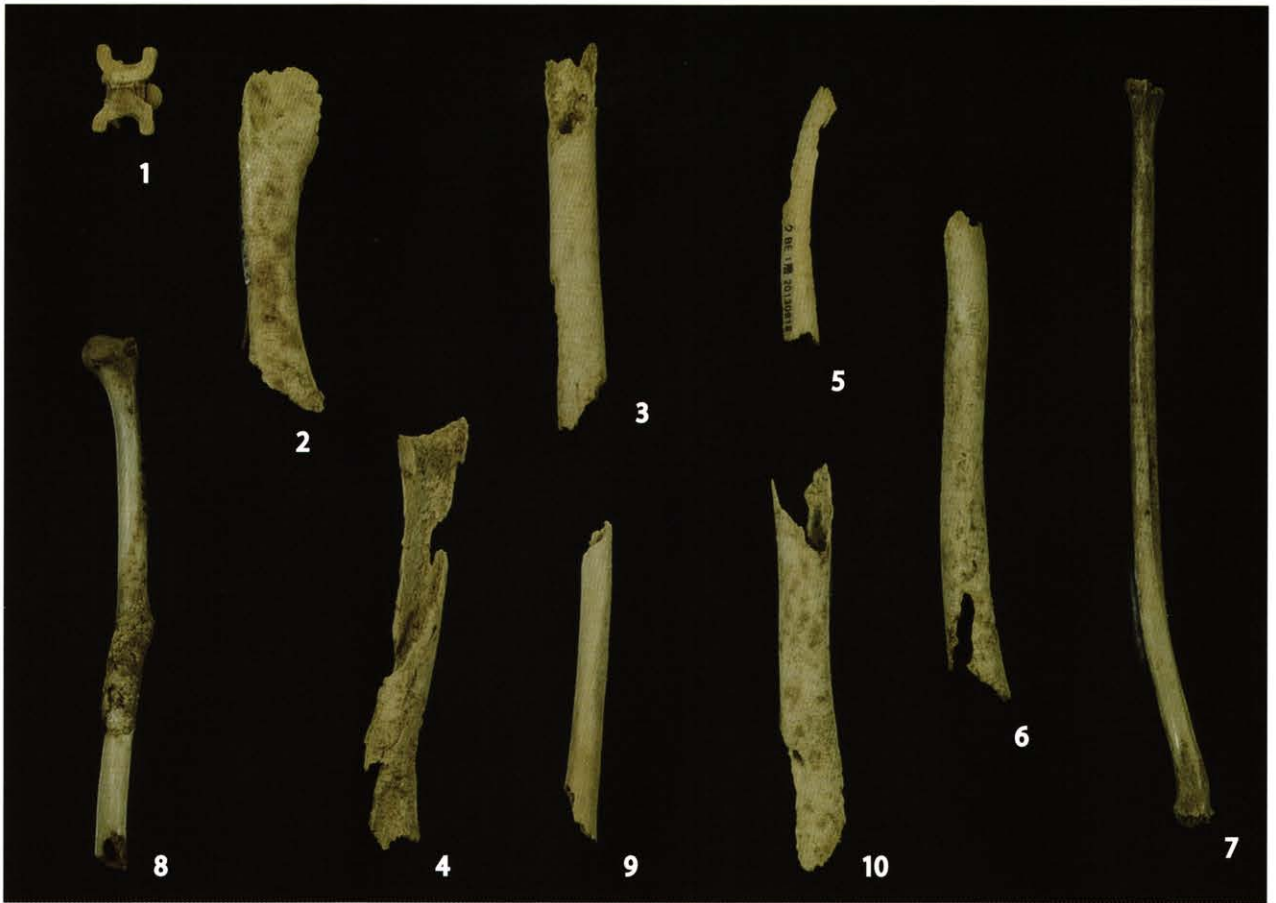


図版 17 (第 10 図) 井戸・その他 出土遺物



図版18 貝類遺体 (上:巻貝・陸産貝 下:二枚貝)

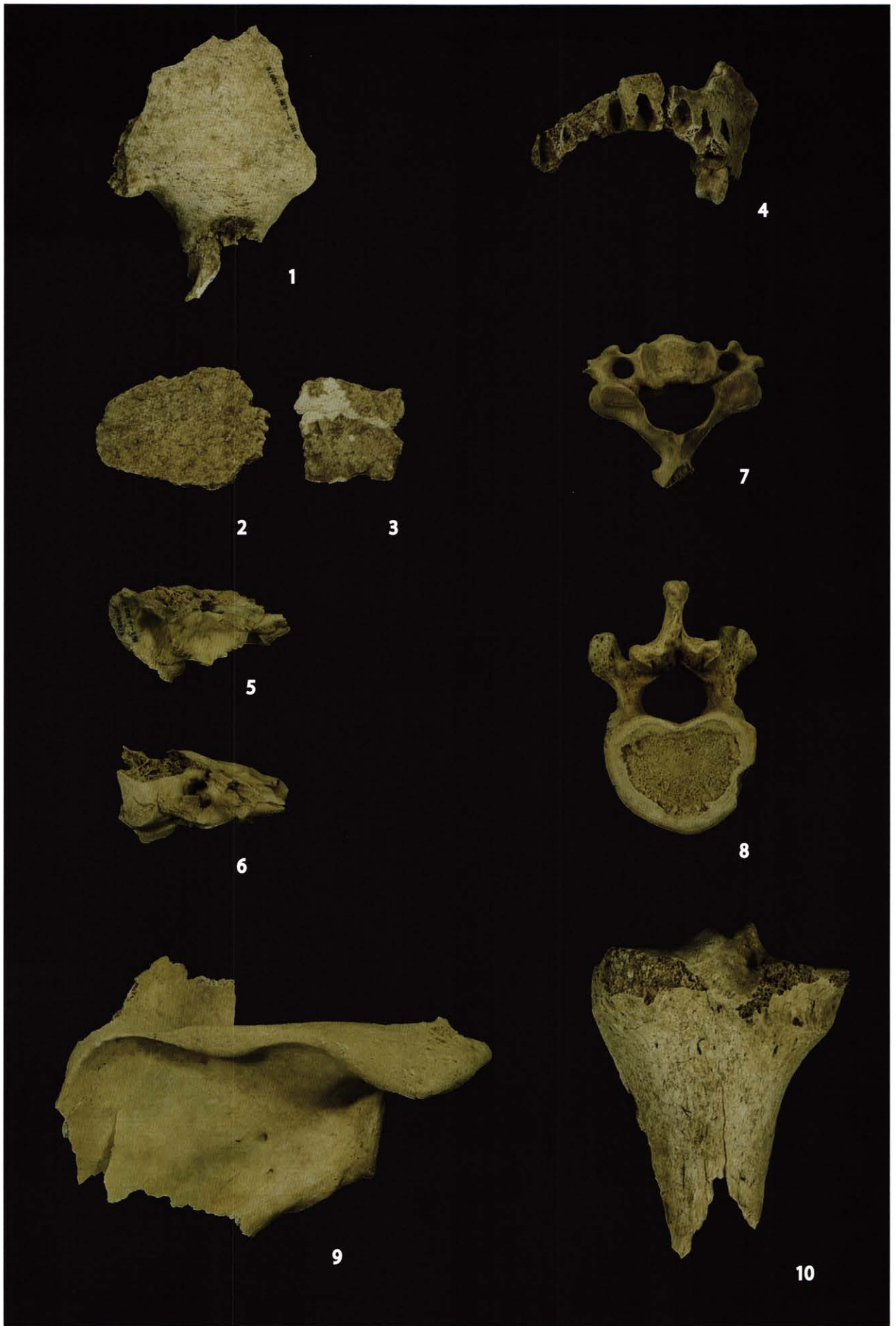




図版19 動物遺体 上:ヘビ(1)・ニワトリ(2~4)・トリ(5~10)  
 下:ネズミ(1.2)・イヌ(3.4)・ブタ(5.6)・ウシカウマ(7)

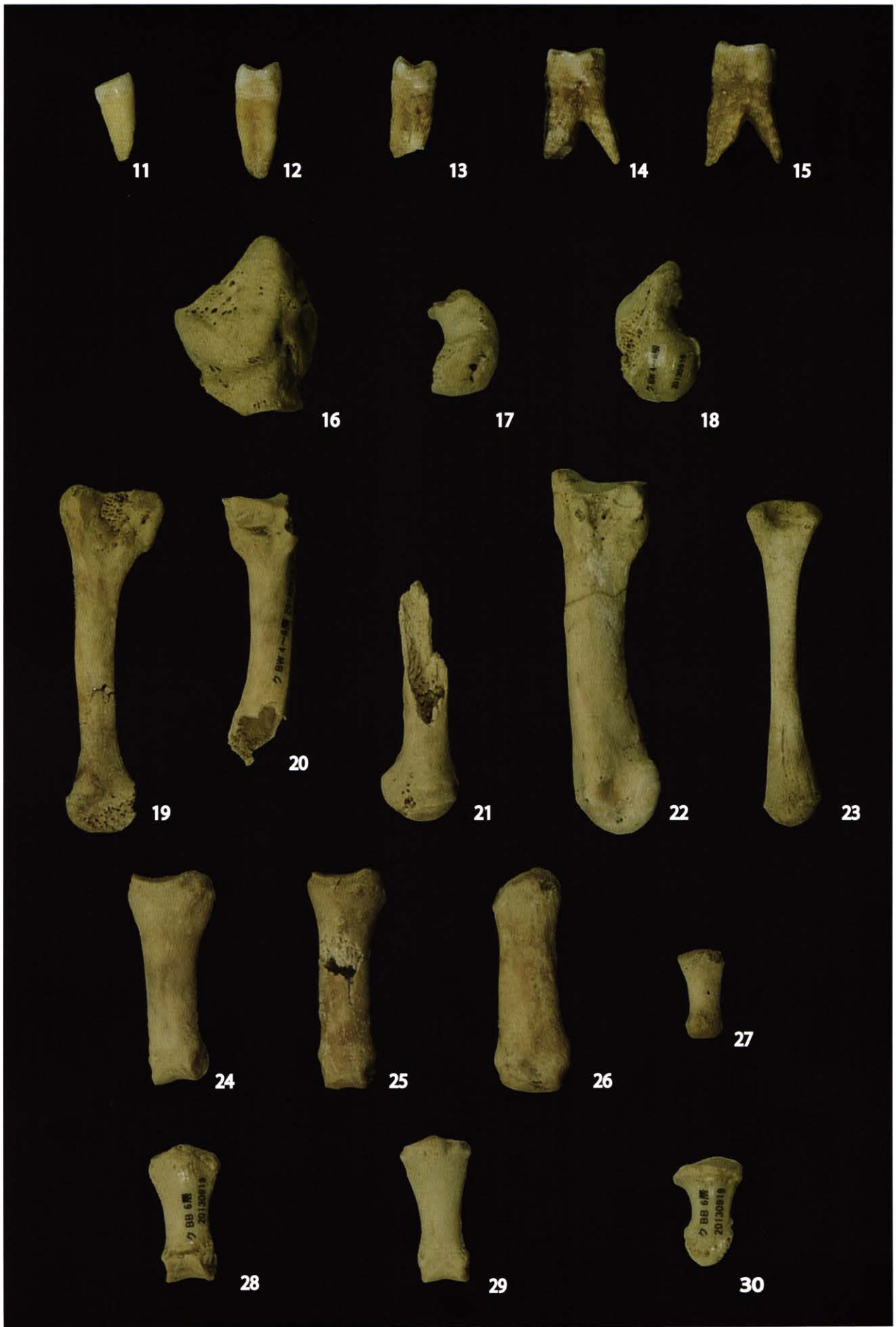






图版20 人骨 1~10

0 5cm



図版21 人骨 11~30



報告書抄録

ふりがな	くらんもー							
書名	蔵 森							
副書名	沖縄西海岸道路北谷拡幅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	北谷町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 39 集							
編著者名	松原哲志・木村謙介・縄田 愛・島田由利佳・仲宗根文子・富名腰いづみ・城間千栄子・宮良知子・山形秀樹・小林克也							
編集機関	北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2016年（平成28年）3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市 町 村	遺 跡 番 号					
くらんもー 蔵 森	おきなわけん 沖縄県 ちやたんちよう 北谷町 あざいへい 字伊平 こあざいはいばる 小字伊礼原	473260	(墓)	26° 19' 19"	127° 45' 30"	20130817 ～ 20130919	6.41㎡	沖縄西海岸道路 北谷拡幅建設工事
			(井戸)	26° 19' 19"	127° 45' 29"		15.738㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
くらんもー 蔵 森	古墓	貝塚時代後期 (弥生～平安並行期) ～ 戦後		掘り込み墓		ガラス片、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、陶質土器、本土産磁器、赤瓦類、レンガ、軽石、獣骨類、貝類、人骨		自然岩盤を利用した掘り込み墓。
	合祀所	近世～ 戦後		井戸		沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、円盤状製品、貝類		戦後米軍に接収され、返還後、再発見された。
要 約	<p>今回の調査は、道路建設に伴う古墓1基、井戸1基の遺構確認調査であった。</p> <p>古墓は自然岩盤を利用した掘り込み墓で、はつり痕(ノミ跡か)が確認されている。</p> <p>井戸では、下位から本来の石積みが見出された。</p> <p>得られた陶磁器の種類は、沖縄産施釉陶器(灰釉碗)、沖縄産無釉陶器、陶質土器、赤瓦類、本土産磁気(印判)などで、近世～戦後と考えられる。</p> <p>墓遺構では、陶磁器、貝類、獣骨類の他に人骨の出土があり、放射性炭素年代測定を実施した。結果1156-1205AD、996-1040AD、645-660ADの年代が得られた。</p>							

北谷町文化財調査報告書 第39集

クランモー

蔵 森

— 沖縄西海岸道路北谷拡幅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行 北谷町教育委員会

2016年（平成28年）3月11日発行

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098-936-3159

編集 株式会社 パスコ

〒904-0103 沖縄県北谷町字桑江473番地5号

印刷 株式会社 丸正印刷

〒903-0211 沖縄県西原町小那覇1215番地